

高潔なる愛国の士 新島 襄 先生

昭和十二年一月二十三日、新島先生のご永眠四十七回記念の日をむかえたとき、東京毎日新聞の夕刊紙に、徳富蘇峯先生の『精神日本の先駆者』と題する、短文が掲載されていたのであります。

『予は幸いに、生を明治・大正・昭和の三朝に亨け、一代の英漢傑士を知るの機会が鮮くなかった。然も『真誠の愛国者』として、未だ新島先生の如き人を見なかつた。先生より、日本国を取除けば、殆んど其七・八分は、空袋となり了らざるを得なかつた。先生の宗教は、日本を精神化せんが為めの宗教であつた。先生の教育は、日本を精神化する教育であつた。先生の一生は、日本を精神化する犠牲であつた……………』

これは蘇峯師が、恩師新島先生の愛国者であられたことを、或いは書き、或いは語つた中の一例に過ぎませんが、この文中にも見られるように、蘇峯師は新島先生を、明治・大正・昭和三代の間、自分は幾多の人物に接する機会に恵まれた、然し『真誠の愛国者』として、未

だ新島先生のような人物は、見たことがない、と告白されておるのであります。

森 中 章 光

およそ、如何なるものでも、自分が生れた国を愛さないものは、先づ無いと申さなければなりません。それぞれ、自分の生国に対する愛国心は持つていてありましよう。これは、人間自然の情と申すべきであります。ところで、同じく愛国と申しましても、その深淺はあると思ひます。また多少の純不純も無いとは考えられません。何れにせよ、この愛国心というものは、平素は心の奥に潜伏して、日常生活に、いつも現はれるようなことではないのであります。大抵は、われわれの心に何等かの刺激をうけるとか、ある環境におかれたような場合、それが、心の中に頭をもたげるのであります。だから、われわれは平素の生活においては、殆んど愛国心など、特別に意識することなく、生活しているのが、普通一般であると思ひます。

ところが、新島先生はどうであつたかというに、蘇峯師も

『先生より日本国を取り除けば、殆んど、其七八分は、空袋となり了らざるを得なかつた……』

と、いつているように、先生の頭の中は、明けても暮れても、日本を思うおもいで、充たされていたようであります。伝えられるところによれば、新島先生は、しばしば八重子夫人に

『わたしは一日と雖も、天下のために祈ることを忘れたことがない。あなたも、私と共に、天下のために祈ることを、忘れないよう心がけて貰いたい』

と、申されたということであります。天下とは、言うまでもなく日本国のことではありますが、一日否、一時と雖も、先生の愛する日本国家のことは、先生の念頭からは、はなれることがなかつたのであります。

先生は、明治七年の晩秋、在米十年、一日といえども忘れることがなかつた、愛する祖国日本に帰られました。そして翌八年同志社を創立されまして、殆んど十年近く経過しましたが、かなり健康を害されましたので、暫く休養かたがた、外遊されることになりました。そして先づ欧州を經由して、思い出深く懐かしき、北米ボストンに向かわれたのであります。伊太利国に上陸して、スイス国に赴かれる途中「サンゴタール」の坂路を登られたのであります。ところが、中途にして心臓に異状を生じ、遂に山頂近くの宿で、休養されることになりました。其時先生は、もはや生きて再び、愛する祖国の土を踏むことはできないと覚悟され、苦しい急病にもかかわらず、携帯のスケッチ用紙に、鉛筆で、遺言をしたためられたのであります。その終りに

『この書を読まれるものは、何人と雖も、わが最愛の故国日本のために祈つて下されたし』

と、いった意味のことが、書かれてあります。

しかし、幸いにして先生の病氣も、やがて少し恢復したので、其後懐かしき北米ボストンに到着されたのであります。着米後京都のデイヴィス先生あてに送られた、お手紙には、このようにしたためられておられるのであります。

『わが心臓は、最愛の日本国のため、燃えて火山の如し。主にありて、安んじるよう予のため、お祈り下さるよう……』

と、したためておられるのであります。

おもうに、先生のように、母国を熱愛するものは、あるいは極めて稀であるかとも思われますが、先生の愛国心は、元治の昔「憂国また憂国」ついに祖国を脱奔して、米土に渡り、十年の修業中、キリスト教の信仰によつてさらに純化せられたのであります。祖国脱奔前の青年武士新島七五三太の胸中に、炎々と燃えていた、任年の憂国心は、北米ニューイングランドにおいて、清教的キリスト教信仰によつて深く培養され、更に聖純化されたのであります。

先生は、在米十年の修学中、多くのものを学ばれ、愛する祖国のため、その智的吸収を怠慢にされるようなことは、勿論なかつたのであります。先生は最後にアンドパー神學校に学ばれ、日本教化のため一大決意をもつて、明治七年の晩秋、愛する祖国の土を踏まれたのであります。かくて先生は幾多の苦難を乗り越え、様々の障碍にもひる

むことなく、この京都に同志社を創設され、日本将来の命運をになうべき若人の教育に、その心身をささげられました。畢竟これは、先生の祖国愛の然らしめたところで、しかもそれは、キリスト教の信仰によって、高められ浄化された愛国心によるものであります。

先生はサンゴタールの遺言の他の一枚に、「主よ仰ぎ願はくば、わが愛する祖国日本のため、多くの「真正なるキリスト教徒」と「高潔なる愛国の士」を起させ給え」と、燃ゆる火焰のごとき、祈りをもってペンをおいておられるのであります。その高潔なる愛国の士は、偏頗でなく、狹隘でなく、頑陋でなく、排他的でなく、利己的なく、私心私慾にとらわれず、そして彼は献身犠牲の精神に富んでおるのであります。そして、その全心身を国家同胞のために献げて、いささかも悔いるところなきものであります。

先生の申される、高潔なる愛国者とは、すなわち、こうした無私奉公の、尊い精神をもった人物を意味するものであります。

おもいまするに、先生自身こそは、実に、真正なるクリスチャンであり、しかもまた、先生こそは、実に、その文字通り、高潔なる愛国者であられました。されば、愛国者としての先生の真面目真骨頂は、先生が真正なるクリスチャンであられたこと、そしてまた、先生自身が、高潔なる愛国者であられたこと、この重要性を理解しなければなりません。

これを要するに、炎々と火山の如く燃えてやまない祖国愛、愛する日本国のためには、たとえ、死ありといえども、己の生命を惜まない祖国愛、愛せずには居られないような祖国愛、これが、めつたに普通

人には見ることのできない、祖国愛が先生の精神なのであります。

されば、これによつても、先生はいわゆる尋常普通の愛国者と、決して同列に考えることはできないのであります。そしてまた、われわれとしましては、それだけでおわつてはならない非常に重要なことが、残されているのであります。それは、先生がキリスト教の信仰に入られてから、入信以前の愛国心が、更に浄化され純化されてきたということであり、固より先生の愛国心は、純なものであります。だが、入信以後はそれが宗教的信仰によつて、一層清浄化されてきたのであります。先生が「高潔なる愛国者を起し給え」と祈りをささげられた、その「高潔なる愛国者」とは、まさしく、この清浄化された愛国心なのであります。この意味において、先生の愛国心はさらに、信仰によつて、それが清浄化された性質のものであったことを考えるべきであると思ひます。そこにはじめて、われわれは先生の偉大にして崇高な、眞の愛国者の性格を発見することができるのであります。先生ご永眠第百回記念の日を迎えるに際し、「平成」に生きるわれらは日本国々運の将来をおもひ、特に先生のこの祈りを、心魂に銘記すべきであると信じます。

皇國を思う丹き心を浅間山によせて

朝な夕な峰に煙の絶えざれば

山の心根如何あるらん

良心を手腕とするもの

奥田 聡

一八九〇年、新島先生が四十八歳で永眠されてより一世紀、時代も大きく変わったわけであるが、先生の遺された言葉は今も脈々として受け継がれているのみならず、現在のこの世紀末の時代にもそのまま適合し、さらに現代に大きい警鐘をならすものであると考える。

同志社の精神を一言でいうならば、それはもちろん新島先生の遺された「良心」の一語にある。これを英語でいうと、「conscience」であり、「science」（科学）に合致することである。科学は難かしいものではなく、真理すなわち無理のない自然の道に従うのが科学であるといえる。種々の発明、発見も元をたどるとその原理は極めて単純であることが多く、ただこの原理を如何に解釈することができるかというところが問題がある。明治以来、日本は近代化はしたが、未だに非合理的なこと、非科学的なことのほうが偉いのだという誤った考え方が残っており、近時、益々非合理的なことが幅をきかせる風潮さえ見られることは残念なことである。科学者新島襄の先見の明には頭が下がればかりである。

さて、良心の一語であるが、それはよく知られているように明治十一年、先生が亡くなられるわずか一年二カ月前に発表された「同志社大学設立の旨意」の中にある。この文章の直接の筆記者は徳富猪一郎氏であったとも云われるが、先生が死の直前の健康を害していた時に出された幾度かの旨意書のうちの最後の旨意書（明治二十二年八月に最後のもう一つの大学設立主旨が出されているが）に「良心」を記されたことより先生の教育理想を最も適切に表現した言葉であるといえる。

新島先生が前後十余年にわたる苦しい在外遊学の間に見た欧米文明とわが国の対比には先生の苦悩の様子とわが国をまともな国にしなればならないという強い責任感を伺い知ることができる。

欧米の物質文明の外形に先生は眩惑されず、欧米諸国がそれぞれ一国の教化の敦いことに目を向けておられ、それが大学設立の動機になったことは最も当を得ていたといつてよい。先生はまた真理を愛するという言葉をしばしば使って居られるが、これは良心と同じことをい



西ドイツ・フライブルグ大学（明治15年草稿の同志社大学設立の旨趣書には同大学は1457年創設とある）の壁にある“DIE WAHRHEIT WIRD EVCH FREI MACHEN”の言葉。

1884年スイスからドイツに旅された新島先生もあるいはこの文字を見られたのではないか想像される。

さらに、「欧米漫遊中の所感」の一節には、「私が米国で感じたのは、宗教の力が上下に普及している一事です。云々。米国の勢力、文運が赫々としているのは政治でなく、教育でなく、ただ宗教の力にありま

っているものと思う。西独フライブルグ大学の壁には「真理は汝を自由ならしめる」という言葉が記されているが、真理への愛、自由への愛が学問の根本をなすもので、欧米の有名大学のほとんどの設立の旨意が真理の探求にあるのに対し、わが国の多くの大学が東京大学も含めて日本近代化のための官吏養成のための大学であったことを考えると、同志社大学設立の旨意が本物であったことをいまさら思うものである。フライブルグ大学と同じ言葉がラテン語で同志社大学今出川校地の明徳館と田辺校地の知真館の壁にあることは案外知られていない。



同志社大学田辺校地・知真館の壁にある“VERITAS LIBERABIT VOS”の言葉。今出川校地・明徳館にも同じ言葉がある。

す。基督教によって養成された良心が堅固なためです。」と記されている。先生はすでに健康を害しながら一八八四年（明治十七年）四月、神戸より二回目の外遊の途へ上ろうとして学生たちに与えた言葉に、「私のために祈るよりも、願わくは日本のために祈れ」がある。新島襄の切実な国と国民を想う心に打たれるばかりである。現今の金権万能、自己中心の世相を見ると、先生の如き考え方がわが国に今こそ最も求められているのではないかと考える。しかして智育偏重の現在のわが国の教育でなく、良心を手腕に運用する人物の教育が今日ほど求められている時はないと思う。戦後の日本は経済界が主導権を握ってきたが、実益のみが優先され、入試の日

めの教育、知識偏重の教育になり下ってしまったことは残念である。このような日本にあって、同志社の存在の意義は極めて大きいと言わねばならない。新島先生永眠一〇〇年にあたり、我々はもう一度想いを新たにしてい進むべきではなからうか。

すなわち、同志社の教育にいかにして新島先生の訓えを実現するかは現場の我々教員にいまも最も望まれていることではないだろうか。昨今の学生に大学在学の意識を問うてみると、学問をするためという学生は極めて少なく、ただ単に大学卒業の名前がほしいだけで、在学中はできるだけ学生生活を楽しむことが目的であると考えている学生が多いことがわかる。それ自体悪いことではないが、大学入学試験に人生の最大のエネルギーを消費し、入学後は次第にポテンシャルが低下する一方で、せみの抜け殻のような無気力な学生が昨今急が増えていることも事実であり、憂慮されることである。とくに気付くことは昨今の青年は物質・金銭を第一に考え、心の重要さを見失っていることで、このようなことは少し前までの同志社では考えられないことである。これまでは有形無形に同志社の教育が成功していたと自負できた。しかし今や同志社も遂に世の風潮に抗することができなくなってきたかと思われるのが昨今の実状ではないかと思う。また学生の社会的マナーは全く無視され、放縦・きままに振る舞うことが若い者の特徴であると思っている者も見られる。図書閲覧室や研究室内では他人にお構いなく大声で話したり、場所を弁えず喫煙し、吸殻を所嫌わず棄てるマナーの悪さが同志社構内でみられることはどうしたことであらうと訝る。真の自由は自己を制御できるところに存在し、自己抑制力を失ったときには他から抑制されることを銘記すべきであると思う。

新島先生が滞米、視察旅行中、文部大丞田中不二麿氏との会談の様子をハーディー夫妻に送った手紙の中にも次のような一節がみられる。「人々がプラトンの哲学や孔子の書物を研究して有徳になった例を知らない。これに反してキリスト教には、人々を自由にし、強くし、有徳にする力がある。徳を愛する人間こそ実に真の人間であって、その人は自らを管理する方法を知っている。」

すなわち自己管理、自己抑制ができる人間の養成が極めて重要であり、大学の自治もそこに根ざしており、真の自由も、真理の探求もそこから生れるものと確信するものである。新島先生はまた「真理を真理として愛せよ」と訓して居られる。

一方的に学生・生徒のマナーの悪さを非難することはたやすいかも知れないが、学問をすることの喜びと厳しさを身をもって知らしめ、自己管理をして真の自由を知ることができるところまでもって行くにはどのような方策を取ればよいのであろうか。中々難かしいことである。しかし新島先生の一言一言は我々にそのとるべき具体的な道を指しているのではなからうか。「新島先生はこういう状況でこのように言われた」と学生に示すことは我々同志社人だけに与えられた教育上の特権のように思われる。

直接、新島先生に御目にかかったことがなく、日本のエヂソンといわれて、先年（一九六七年）九十五歳で亡くなられた加藤与五郎先生から口伝えに聞いた新島先生のことを想うとき、真理は古今東西を通じて変らないものであるということ、この真理の探求には命がけで当らなければならないことを痛感するばかりである。（大学工学部教授）

やりくり・調和・是正

佐野安仁

(一)

植村正久は、新島襄を「俗的勢力、外国宗派の金力および自己の信念と理想、これらをやりくりして調和させ、好結果をおさめんとした」と評している。この「やりくりして調和させ」という新島の器量を植村は、全面的に賞揚したわけではない。確かに新島には宣教師としての立場と教育者としての立場を、また、キリスト教と学問とを、聖と俗とを調和させることに優れた能力があった。こうした新島の才能を植村が具体的に知ったのは、恐らく同志社の設立とその運営維持法からであったと思われる。というのは、当時、教会やキリスト教主義学校の設定およびその運営に関しては「自給論」が強調され、その実現に向けてキリスト教の諸活動は苦悩していたからである。

周知のように新島は、アメリカン・ボードの宣教師であった。アメリカン・ボードの日本における宣教方針は、日本人による自給の教会を設立させようとすることにあった。「自給」とは世俗勢力や外国宗派の資金的援助に頼らず、日本人信徒が独力で教会を形成し、その運営

と維持とに当るということであった。この自給に徹するということは、金銭上のことだけでなく、自給によって独立の精神を培うという目的があり、同時に日本人信徒に自治、自立の能力を育成しようとするねらいもあった。

新島には宣教師という立場から当然に、自給による教会形成を指導する責務があった。彼の主たる関心が当初から同志社という教育機関に向けられていたとしても、それがキリスト教に基づく事業である限り自給を指すものでなければならなかった。ところが、新島は、同志社大学の設立に際して「基督教主義を以て徳育の基本とす」と宣言しながら「基督教を拡張せんが為に大学校を設立するにあらず」と断言している。つまり、同志社大学は「基督教拡張の手段」として、また「伝道師養成の目的」で設立するのではなく、「それ以上のも」であると明言している。「基督教主義」を基本としながら「基督教の拡張の手段」ではないという新島の言明は、当時のキリスト教関係者には理解しにくい点があった。それに加えて、新島は大学設立の資金を当時

の政財界の有力者に求めるために奔走した。こうした新島の言動は、自給によってキリスト教の伝道、拡張に献身していた者たちにとつては理解しがたいものであり、誤解を生じさせるものであつた。

(二)

だが、新島は自給論を軽視したわけではない。彼は自ら、また神学生と共に日本各地を伝道し、自給教会の設立を推奨していた。さらに、自給論が目指していた日本人信徒の独立、自治、自立といった精神を重視し、それを同志社の教育を通して学生たちに啓培しようとしていた。しかし、新島が「吾人が志す所のもの」とは、「自給によって日本人の手で教会を」ということ以上のものであつた。それは「人民の手に拠る」教育の実現を思念するものであつた。

新島の同志社大学設立の訴えは、一方でキリスト教主義を標榜しており、他方で「人民の手に拠る」教育の実現を提唱している。新島は、キリスト教の徳義に生きるといふ個人の信条から個を生かす教育を思念したのである。これは、明らかに「公」の立場からの教育に対抗する大胆な発想であつた。個を生かす教育は、基本的には「私」の視点を重視するものであり、「私」の視点から事業を起こす際には人民の発意を結集して総意を明確にしなければならぬ。新島はこの点を重視し、まず自らの信条から「基督教主義」を教育に適用し、それによって青年の精神と品性を陶冶し、「一国の良心とも謂ふべき人々を養成せんと欲す」と広く世に訴えたのである。つまり新島の「志す所のもの」とは、こうした教育の実現にあつた。

(三)

ところで、人民の発意を結集するためには多元を統一する政治性や

組織の理論が必要となる、また寛容と広い視野を必要とする、新島はこうした要件を備え、さらに行動力もあつた。しかし、その新島の政治力、組織力、行動力は、「基督教主義を基本とする」という視点からみれば、かなり制約されるものであつた。つまり「人民の手に拠る」という視点の強調は、「基督教主義」を制約することになり、逆に「基督教主義」の強調は「人民の手に拠る」という視点を制約することになる。「基督教主義」が生活の共通基盤であれば、このような制約はないのであるが、その基盤のない社会ではこうした問題に苦悩することになる。

つまり、キリスト教主義を標榜する営みは「人民の手に拠る」という発想と結びつくとき後者からの制約により歪みを伴うものとなりかねない。また、純粹にキリスト教主義を貫徹しようとすれば周囲から孤立を招くことになる。歪みを恐れずこの世と妥協するか。それとも孤立を恐れず主義を貫徹するか。新島の選択は前者であつたように思われる。つまり歪みを恐れず「人民の手に拠る」という発想を大切にしたい。だが同時に後者の視点から歪みを反省していた。その反省によつて新島は自らのキリスト教信仰を「良心の運用」に発現させ、世俗の歪みをその「良心の運用」によつて是正しようとした。この思念から「良心を手腕に運用する同志」の輩出を教育の急務とみたのである。

世俗的組織による運営の歪みを新島はキリスト教に基づく良心の運用によつて是正しようとした。同志社のキリスト教主義とは、こうした良心の運用で世俗の歪みを是正する働きに体现されるべきものと思われる。

蘇峰・ミルトン・新島襄

伊藤 彌彦

戦後七年目の一九五三年、日本でふたたび自由や民主主義を公然と語ることのできる時代のなかで、同志社を訪れた晩年の徳富蘇峰はポロリとこんな発言を残している。「新島先生の特色と申すべきものは、自由を愛することである。先生が自由を愛したことは、ミルトンが自由を愛したやうなもので、先生は其の自由主義をアメリカから獲得して来たのであって、これには間違いない」と（「新島先生を語る」〔徳富蘇峰「新島先生」所収〕。ミルトンの自由と新島襄、それを蘇峰が指摘したという事実はいろいろな連想を呼びおこしてくれる。

まず、若き日の蘇峰がミルトンから深い影響をうけていたことは著述の端々に現われている。マコーレーの『ミルトン伝』との出会いが大きかった。この本は「新しくミルトンを見直したもので、進歩主義、自由主義、革新主義がミルトンの主体となつてゐる。……クロムウェルの部下として、その革新政策を進めた偉大な改革家であつた。この改革家としての点をマコーレーは強調した」といわれる（柳田泉『明治初期の文学思想』。弱冠二十五歳のマコーレーが著したこの評伝は、

明治十年東京大学から英文で復刻され、明治十三年にはこれまた弱冠十七歳の蘇峰によつてすでに読みこまれていた。感動した蘇峰の「何時か此の題目に就て、論稿を試みん」との思いは、三十数年後の大正六年、『杜甫と弥耳敦』に結実した（以上の蘇峰とミルトンの関係は、宮西光雄『明治百年にわたる日本のミルトン研究』に負う）。

ミルトン惚れのころの蘇峰は、熊本での大江義塾の成功後、上京して刊行した『将来之日本』、『新日本之青年』の大成功によつて一躍文名を全国に響かせ、さらに『国民之友』発行を始めた時代、衆望を担つてもつとも光り輝いた時代であつた。「懐疑ノ世界」「冷笑者流ノ輩出」する明治日本、そして「中等社会ノ墜落」も目立ちはじめた地方社会にたいして、新世代の力で「自管自活ノ社会」「平民社会」を建設しようとして蘇峰は声を張つた。蘇峰の目標は言論を武器とし、イギリス革命の諸局面をモデルとし、「天保ノ老人」に代る「明治ノ青年」を実践的担い手として、明治維新を完成することであつた。このときにクロンウェル、ハンブデンらとならんでミルトンが登場した。

「早朝ヲ以テ一日ノ天気ヲ兆スルカ如ク。小児ヲ以テ大人ヲトス可シ」とミルトンを引用して青年を勇氣づけ（『新日本之青年』）、あるいは地方の現情を分析して「地方會議に於ては、田野ミルトン、ハンブデン等が地方の査斯^{チキス}たる県知事と確執^{チキス}している、と表現する（嗟呼國民之友生れたり）。ミルトンは徹頭徹尾、青年の味方、改革派を支える精神的支柱として引照されたのである。蘇峰は新島襄の自由をこのミルトンの自由になぞらえたのである、どういう意味であらうか。

ミルトンは筆でもって古い英国教会の權威、監督制を攻撃した。つぎには国教会王党派の去つた議會を牛耳るビューリタン長老派の政治を敢然と論難した。いわく「つい最近まで……監督が專一の管轄權を持つことを否認したばかりの人が、今度は自分の家で私用の椅子に掛けたまゝ同じことを始めた。「これは決して断じて監督制度を廃止することにはならない。これはただ監督制度を甲乙取り替えるだけのことである」と（石田憲次他訳『言論の自由』）。この独立派クロムウエルの秘書ミルトンは自由をどう考えたか、単に牧師がそう言うからとか、長老の最高會議でそう決つたからというだけで、それ以外の理由を知らないで物事を信ずる態度に自由はない。「たとえ異端者呼ばわりをされていようと、彼等の良心の最上の導きのままに神の掟を解釈して、純潔な生活を送ろうと願っている人々の言葉を忍耐と謙虚とを以て聴き、たとえ我々とは多少意見が違つても、彼等を寛容する」態度を選ぶことが自由を保証する、という（同書）。この前提には「理性」は必ず真理を導くとする信頼があつた。

では新島襄の場合はどうか。新島にとつては將軍や藩主や上役が監督する旧藩藩体制がミルトンが対決した国教会に相当する。そして幕

府倒壊後の新政序構成原理としては、クロムウエルの言葉「所謂ル良心ヲ手腕ニ運用スル」を掲げた。またミルトン同様、旧世界側の監督制が新社会内に姿を変えて復活する兆候を生理的といえるするどい感覺で察知し、いささか感情的なまでに攻撃した。その典型的な実例が明治十九年から四年間争いつづけられた教会の組織方法をめぐる一致教会と組合教会の合併問題のばあいであつた。

「今ノ一致教会」憲法ノ如キハ寡人政府ニ傾向アリ、……此レ只々我カ自治会ノ為ニ惜ムノニアラス、天下将来ノ為ニモ甚痛歎スルシテ止マサル也、全体教会ノ牧師ナルモノハ我カ自治会ノ先生方ニ致タセ、矢張治者ノ地位ニ立ツトモノナレハ、兎角治メ易キ事ニ着目シテ不知不知僅々ノ手ニ政治ヲ握ル事ヲ好ムニ至ルハ勢ノ免カレサル所ナリ」。

やがて会衆が「任他主義ニ流」れ、「数年ヲ出サルニ内ニ我カ会ハ自治ノ精神ヲ失ヒテ全ク寡人政治ノ下ニ自由ヲ売却シ去ル」ことを心配した（明21・10・17、馬場種太郎宛書簡、『新島襄全集5』）。教会自治をこえて「天下将来」に関する問題とした点に注目しよう。これは秩序構成原理としての、自発結社の精神、「ディモクラチクアプリンシプル」喪失の危機、いい換えれば徳川専制政治の復活の兆であつた。だから断固遮断をはかつたのである。「自由教育自治教会両者併行那家万歳」の文言は、良心と自発結社と新しい社会秩序を結節させる悲願を示していた。

若き日にミルトン惚れた蘇峰が戦後デモクラシーのなかで想起したのは、旧体制と対決して自由を求めたミルトンと新島襄のこのような類似性ではなかつたらうか。

（大学法学部教授）

新島襄とウエーバー

——良心の自由について——

鈴木秀一

(一)

日本思想史学の素人にすぎない私だが、初めて新島襄の存在に触れたときの心を洗われる思いは忘れることができない。それは、マックス・ウエーバーの宗教社会学を学んだときの感動と似ていた。ふたりに共通している点は、高邁な理念と世俗の現実との激しい緊張の中に生きた孤高の知識人だったということである。

「知識人」をウエーバーにならって定義すれば、世界を意味ある宇宙として捉え、それに対して自らの生き方を確定しようとする者、つまり「意味問題 Sinn-Problem」として世界を把握する者、ということになる(1)。

この意味で、混沌のなかから新しい国家社会を建設しつつあった明治は(ウエーバーの時代のドイツと同様に)、まさに知識人たちに、自己の理念と日本の現実との鋭い緊張を強いた時代だった。

そして、西欧文明は、明治の知識人たちにとって、日本の向かうべ

き進路にそびえ立っていた。洋行し、「遠いところから帰ってきた」(夏目漱石「道草」)知識人たちは、一様に、西欧と日本との落差に愕然とした。西欧の「遠さ」は距離のみではなかったのである。そんな彼らにとって、「西欧化」すなわち「近代化」は、疑問の余地のない至上命題だった。

ある者は、西欧諸国に負けない軍事力を夢見たし、またある者は、物質的技術の輸入による「和魂洋才」を主張した。それぞれがそれぞれに日本の「近代化」を構想したのである。しかし、「良心の自由」という視点からそれを構想した人がはたしてどれくらいいたのだろうか。新島襄は、まちがいなくその中のひとりだった。

新島ほど国家の問題を国民の「個の自由」の問題と結びつけて考えた思想家はいなかった。ウエーバーによれば、この「良心の自由」こそが「第一義的な人権」概念であり、経済的な営利行為の自由や、私的所有権などの近代的基本権は、すべてここから派生するという(2)。そして、近代西欧においては、Austriakとしての教会組織や国家の対立

物であるゼクテ Sekte が「良心の自由」の担い手となった。ゼクテの厳密な定義をする余裕はここではないが、具体的には、アメリカ合衆国のクラブ制度のような自治集団がその性格をとどめている。このゼクテを基盤として、権力に対する被支配者ひとりひとりの「権利」概念と近代市民社会・近代資本主義が成立したのである(3)。

こうして、「良心の自由」の要求は、ゼクテを通して西欧近代のリベラリズムの源泉となったが、いみじくも新島は「千万金ニモカヘラレヌ自由自治、自個ノ自由」(新島襄全集、同朋舎、2、五一―八頁)というゼクテ的な自由主義によって、日本の「近代化」をはかろうとした。西欧文明の軍備や技術などの派手な外面に眼を奪われることなく、近代市民社会の最も根源的な本質を見抜いたのである。

ウェーバーは、個の自由という人権の時代からの獲得物なしで生きるると言うのははなはだしい自己欺瞞であるといっているが、新島は、「近代化」しつつある日本に対し同じ問いを投げかけたのである。

(二)

昨年、「新島襄における宗教と国家——近代日本知識人のエートスとリベラリズム」(「近代群馬の思想群像Ⅱ」、日本経済評論社)という拙論を書くために、新島全集を読んだ際に、私は、新島を通して、上記の意味で日本の「近代化」についての危機感をいっそう明白に意識するようになった。そして同時に、闇夜の灯台のような新島の存在によって、何か救われたような気がした。

もちろん一方では、日本は近代化のチャンピオンであり、アジアの

優等生である……そんな捉え方もある。維新から出発して、日清・日露戦争をへて、一九四五年の敗戦までの「近代化」と戦後の「近代化」は対極的である、ともいわれる。そう信じたい気はする。

たしかに戦後の経済成長は日本に「豊かな社会」をもたらした。その結果、「良心の自由」や市民社会などなくても高度資本主義化は可能であり、日本はすでに欧米を追い越したという声も少なくない。

これに対して私はふたつの問題提起をしておきたい。まず第一に、日本的な資本主義をウェーバー的な視点から見直してみたい。戦後の日本企業の驚くべき経済的効率性を説明するためには、そこに何らかの「合理主義」を見出さなければならぬだろう。この日本的「合理主義」は、江戸期の商人道徳や儒教倫理の経験的合理主義などに由来し(4)、明治以降、近代技術の迅速な吸収と資本主義化を可能にした。しかしこの「合理主義」は、ウェーバーによれば、合理的に現世に順応するという意味での「合理主義」である(5)。換言すれば、市民的エートスによって伝統主義を克服する合理主義ではなく、共同体的な「賤民資本主義」が効率性を向上させたものにすぎない。

日本的「合理主義」の本質は何か。経済史家の中村勝己教授は的確にも零戦に例えておられる(6)。零戦とは太平洋戦争初期に作られた日本の戦闘機であり、あらゆる「贅肉をそぎ落として」設計された高性能機だった。日本企業の効率性もこれと同じではないか。零戦が搭乗員の安全性までもそぎ落として飛んでいたように、戦後の経済成長も労働者の「人間の尊厳」を無視して進んできたというのである。

西欧の合理主義とは対照的に、日本の「賤民資本主義」的な「合理主義」にはそれと対抗する原理がないから、ひとたび経済的効率性と

いう目標が与えられると、すべてのものを犠牲にしてそれに向かつて突き進む。そしてその過程では、決して削り落としてはならないはずのものまでも犠牲にしてゆく。日本の経済社会は、資本主義という外見は同じでも「市民的資本主義」における倫理的・営利追求とは質的に違う社会なのである。

第二に、今日の日本は本当に「豊か」なのかという点である。周知のように、今日の日本経済の根本問題としてGNP統計のレベルでの豊かさと生活レベルでの貧しさのギャップがしばしば指摘される。いわゆるフローの豊かさとストックの貧困の問題である。さらに日本の長時間労働は国際問題にまでなっている。日本の労働者の非人間的な長時間残業や、最悪ともいえるべき交通環境の中での遠距離通勤、またオフタイムでの「おつきあい」(週末の接待ゴルフ)など、欧米の労働者には想像も出来ないことだろう。

例えば東京のサラリーマンにとつて、仕事を離れて、本当に自分の人格的成長のための時間(「可処分時間(7)')は一生のうちにはたしてどれくらい残されているだろうか。戦後の日本経済を支えてきたひとりひとりの日本人の生活は本当に「豊か」で幸福といえるのか。日本の「豊かさ」の量ではなく、その質を見つめ直す時期にきている。

ところでこんな実話がある。敗戦前夜、作家の司馬遼太郎氏は戦車隊に所属して、栃木県にいた。そこに、大本営から参謀が来たときのことである。連隊のある将校が参謀に質問をした。「われわれの連隊は、敵が上陸すると同時に南下して敵を水際で撃滅する任務を持っているが、しかし、敵上陸とともに、東京都の避難民が荷車に家財を積んで北上してくるであろうから、当然、街道の交通困難が予想される。

こういう場合、わが八十輛の中戦車は、戦場到着までに立ち往生してしまう。どうすればよいか」高等な戦術論ではなくて、ごく常識的な質問である。だから大本営少佐参謀も、ごくあたりまえな表情で答えた。「ひき殺して行く」(8)。

敗戦後にこの少佐の発言を責めるのは容易い。問題は、この発言、この感覚こそが、日本の「近代化」のいわば結論であるということだろう。戦後の日本人ははたしてこの少佐から遠いところに生きているのであろうか。あるいは、帝国陸軍が「わが社」に置き換えられただけに過ぎないのだろうか。いずれにせよ、日本の「近代化」は、新島のプランとはまったく違う方向にすすんだわけである。

新島襄永眠百年にあたり、私たちはまだこんなところに道草をくつております、と先生に申し上げねばならないのかも知れない。今日いよいよ新島襄の存在意義の大きさと日本人のひとりとしての歴史的責任を痛感するしだいである。

(1) M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen 1976, S. 304-307.

(2) M. Weber, *WuG*, S. 725. (3) M. Weber, *WuG*, S. 725.

(4) たとえば源了圓『徳川合理思想の系譜』中央公論社ほか参照。

(5) ウェーバー『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敏三訳、みすず書房、一八二頁。

(6) 中村勝己『経済的合理性を超えて』みすず書房、五五頁。

(7) 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書房、一〇九頁。

(8) 司馬遼太郎、『歴史の中の日本』中央公論社、二八九頁。

(高崎経済大学助教授)

火、そして涙と生きる

高橋眞司

かつて内村鑑三の『余は如何にして基督信者となりし乎』を読んだとき、アメリカ流竄から内村が一枚の卒業証書も持ちかえらなかつたこと、だが、かれは自分が得たいと望んだものを得た、すなわち「ユダヤ人には躡くもの、ギリシヤ人には愚かなもの」を、という記事につよい感銘をうけた。

内村より二十年前に、鎖国の国禁を犯してアメリカに密航した新島襄が、苦節十年を経て帰国したとき、かれは学士 (Bachelor of Science) の称号をもち、アメリカの会衆派の日本宣教にたずさわる宣教師に任命されていた。しかし、新島がアメリカ滞在中、いかに勤勉にいかなる新知識を修得したにせよ、かれにとつてアメリカ体験の核心は、**「祈り」**という渡航以前の**新島**が**あ**ずかり知らなかつた魂の**い**となみであつたであらう。

新島のみじかい青春記といくつかの伝記をよんでみても、新島がこうした祈りをいつ会得するにいたつたかを特定することはむずかしいように思う。ただ、私たちが知るの**は**、近代日本の歴史形成、思想形

成の途上で、新島襄が他に類のない、独特の人間として登場することである。

明治前期の思想家のうち、たとえば、元田永孚、加藤弘之、西村茂樹、福沢諭吉、馬場辰猪、植木枝盛、中江兆民など、これまでに自伝や日記などを読んだことのある幾人かの思想家を念頭におくとき、あるいはまた福沢諭吉、大隈重信など大学の創設者を脳裏に思いうかべるとき、新島襄の人間像はこれらの人々とはまったく異質の印象をあたえる。それは、かれにあつては祈りが根源的経験であつた、ということと関わりがある。

新島**の**特色を、明治教育思想史の著者藤原喜代蔵はこう書き記している。

「新島を追懐する者の言ふ所を聞くに、先づ其心に浮ぶ所の者は、彼の眼が常に涙を含み、彼の語調が常に少しく打頭ひたる点にありと言ふ。彼は決して雄弁にはあらざりき。されど彼の演説するや、常に打頭ひたる語調と涙を含める眼とを以て、多くの人を感動せし

たり。彼は決して達弁の人にはあらざりき。されど彼が一たび口を開くや、一言一句、熱情を吐露し、其の情調極に達するや、屢々流涕歎歎して、殆んど一語を発し能はざりき。〔明治教育思想史〕富山房、一九〇九年。

おもえば、一八七四年秋、新島は帰国に先だつて、ヴァーモント州ラットランドで開催されたアメリカン・ボードの年次大会の席上、たちどころに二、五〇〇ドルの献金の申出をひき出すことができた。新島の訴えはごく短いものであった。だが、「一言一句、熱情を吐露し、其の情調極に達するや、屢々流涕歎歎して、殆んど一語を発し能はざりき」という状況で訴えがなされたのであれば、一座の人々が感動につき動かされて次々に拠金の約束を申し出たのも首肯できる（新島は「I will... weep no more.」と言っている。事實はさらに感動的であったにちがいない）。新島裏が私的な集いにおいても、公開の場においても、人前で涙を見せることを恥じないのは、それが祈りにおけるかれの真実であつたから、ではないか。

新島裏は「神の火」ということばを使っている（デイヴィス著『新島裏の生涯』第七章）。

極東の、異教の島国に生を享けた新島は、罪というものを、キリスト教国に生まれた敬虔なクリスチャンとはまた異なる次元で把握したであろう。真理を求めて極東の地から太平洋に船出してさまざま若者に神がご自身をお示しになったこと——この啓示、この事実がすでにそれだけで新島にとつては絶対的な神の愛の証であつた。

「神の火」とは神がパッション (Passion) として、燃えさかる愛として捉えられているということだ。新島はみずからの個人史のうちに、

神からの離反(罪)と神の啓示(愛)を確認することができた。自分史のうちに確証することのできる神の恵みの豊かさによって、新島は「三、三〇〇万」の日本同胞の救済史の完全な成就をまほろしとして見たでもあろうか。新島裏が祈りにおいて声をふるわせ、落ちる涙を隠そうともしなかつたのは、自らの来歴のうちにあふれてやまない神の恵みのゆえに、であつたであろう。

祈りにおいてひとはなぜ泣くのか。この疑問は新島裏の生涯を辿ることによって解けたと言つていい。

新島裏の人間像が、私がまなびてきた啓蒙期日本の知識人の何人とも異なること、海老名弾正、内村鑑三、新渡戸稲造のようなキリスト者とも印象を異にするのは、新島裏においては、祈りがかれのすべてであつたからだと言いたい。新島によしんば何らかの才能があつたとしても（新島は前記の人々のような多彩な才能、学識と詩才と雄弁とを持ちあわせていなかつたというべきであらうか）、それはかれの生涯における祈りの比重に比すれば、何ものでもなかつた。

祈りにおいて涙するのは新島の個性だという人がいるかもしれない。他にも同じように感受性に富んだひとはいる、と。だが、たといそれが彼の個性だとしても、それは単に自然的な気質でなく、かれの根源的経験によって培われ養われた個性なのである。その意味で、涙ながらの祈りは新島裏の数多くのエピソードの一つなのでなく、かれの人格の流露そのものであつた。

異教の、罪深い、あわれな一身に、神がご自身を顕現して下さつたということ——新島の祈りはこの恵みにたいする感謝にほかならない。「流涕歎歎」はこの恩寵にたいする素朴な応答にほかならない。

罪の文化より恥の文化と評されるこの国の精神的風土、キリスト者の系譜のうちに、新島襄は特異な地位を占める。新島襄が神の前に立つ自分の赤裸々な真実を、天皇制下の日本で、はばからずつくりろわず表現したところにかれの信仰の質がにじみでている。神と共にある自らの真実をさらすことを恥じない態度、新島襄がこの世でなしたすべての業は、この態度から奔出したと言えないであろうか。かれの敢為、柔和、忍耐などの徳性は、道徳的修練のたまものというより、こうした態度におのずと随伴するものであったであろう。

文明史的規模の断絶と障害と敵意とに直面して、かれは自らに誇るべき何ものをも持たないこと（バルトのいう人間の「空洞性」）を自覚

（長崎総合科学大学助教）

『創設期の同志社』

——卒業生たちの回想録——

（同志社社史資料室 一九八六年十二月）

学生のなかにもたまには、初期の同志社のことを知りたいと言ってくる者がある。また、学生生徒を対象にして、初期の同志社のお話することもある。そういうとき、文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

四四〇ページにおよぶ本だから、尻込みする者もいるけれども、全部読みなさいと言っているんじゃない、と言っている。収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十六名。湯浅初子ら女学校に学んだ十五名。これらのうち、関心がある人の項目から読めばいいのである。

しないではいられなかった。そして、創業者の困難を一身に背負った、かれの事業の一切はむしろこの自覚から成し遂げられたというべきであろう。

病身がちの、みじかい新島襄の生涯によって、私たちはキリスト者の生涯と事業の秘義をも教えられるのである。

(1) ただし、内村も新島と同じアーモスト大学の称号を得ていた。

(2) 「ラットランド・ヘラルド」誌、一八七四年一〇月九日号（『同志社百年史』資料編二、所収によれば、その場で申出のあった拠金の総額は二、五〇〇ドルである。

勧める理由は、読みやすくて、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざつくばらんにな学時代の思ひ出を語った談話を要約筆記したものだからである。

彼らはいと楽しげに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネット、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思ひ出を語るのである。すべてが生き生きとしている。

面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかでなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。

だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

（頒価一五〇〇円、同志社収益事業課扱い）

新島先生と教会

遠藤 彰

新島先生の説教の中に、「天国の鍵」というのがある。これは一八八三（明治一六）年に大阪教会でなされたものである（『新島襄全集第二巻所収』）。聖書の箇所は、マタイ福音書一六章一六節以下である。ペテロがイエスに「爾はキリスト・生ける神の子なり」と告白したのに対応して「爾はペテロなり。我は我が教会をこの磐の上に建つべし。……我、天国の鍵を爾に与うべし」とイエスが語ったという、よく知られた箇所である。

新島先生はこの説教でマタイのこの箇所から注目すべき二つのポイントをひき出している。一つは、教会の基礎がイエスを「生ける神の子キリスト」と信じる信仰にあること。第二に、学術、知識、富貴、利達などは神が人間に賜わったものであるゆえに、人はよろしくこれらをもって神の栄えを顕わすべきである。しかしこれらはそのままでは教会の基礎とはなりえない。教会はキリストへの信仰の上に建てられてはじめて地の塩、世の光となることができるということである。これは、マルティン・ルターいらいのこの箇所のプロテストメントの

解釈に即したきわめて正統的なものである。人間ペテロに教会の礎が置かれたのでも、そのような特別の権威がその後継者に継承されることが約束されたのでもなく、いわんや教会が知識、学問、財力、富力をその存立の基とすることを許容されたのでもない。人間と自然は神による被造であつて、それ自体神に繋がることはできない。

同志社の開業式は一八七五年一月二九日、寺町丸太町上ル松蔭町にあつた高松保実邸（教室のために借用された）において行われた。参会者は新島先生とジェローム・D・デイヴィス先生と八名の生徒であつた。しかし、同志社の真の開業は、その一時間前に、新島丸頭町にあつた新島先生の私宅での、新島、デイヴィス両先生と六名の生徒とによる祈禱会をもつてなされたというべきである。デイヴィス先生の記述によれば「あの朝開校に先だつて新島が自宅で捧げたあのやさしい、涙にみちた、真剣な祈りを私は決して忘れることができない。すべての者が心から祈つた」（『新島襄の生涯』）とある。同志社は礼拝と祈りで始められたのであつた。

翌年九月、山本寛馬氏より譲渡された今出川の土地(旧薩摩藩邸跡)に、第一、第二寮と食堂が完成し、教室はここに移動して来た。寮といても生徒の居室のほかには教室、講堂、礼拝室が備えられていて、礼拝が毎朝行われ、各授業は教師の祈りで始められた。

同年一月二十六日西京第一公会が、寺町今出川下ル西入ル御苑内柳原邸のドワイト・W・ラーネッド先生の居宅で学生市原盛宏を仮牧師として、二月三日第二公会が新島先生宅で先生を仮牧師として、さらに二月一〇日第三公会が東竹屋町のエドワード・T・ドーン先生宅で学生本間重慶を仮牧師として、それぞれ発足した。

同志社はその開業に当って、学科目に聖書を入れることができなかつた。府知事榎村正直は、官許英学校の認可を与える条件として、文部大輔田中不二麿の指示により学科目中の「聖經」を「修身学」に改めることを要求し、「聖經」(聖書)を教える場合は校地外で正規の科目外の講義とすることを求めた。相国寺南門通東側にあった豆腐屋の廃屋を購入して改造したいわゆる「三〇番教室」(現在のアーモスト館管理人宅のあたり)で、聖書が講じられることが可能となり、開業の翌年にはここで「余科」が開校され、熊本バンド出身者たちや英学校卒業者たちを対象とする神学教育がスタートすることとなったのである。

しかし、府学務課の監察は厳しく、右の「修身学」についての同課の「同志社景況記」(明治一二年六月)によると、学校側からの届けによれば教科書はホプキンス「修身学」(『新島襄全集』第二巻所収)であるはずが、各自の机上にあるものは聖書のみである、しかも教師が生徒にそれを輪読させていた、とある。新島先生はこのことにつき、

府知事に二度にわたり始末書を提出させられている。二度目の始末書に先生はこのように書いている。

「早々取調候処デビス氏学務課長巡覽之節はホプキンス氏修身学を教へ終り候に生徒中よりホプキンス氏の論説基礎と被致候耶蘇の教誡不審のかど有之答問致候処教科書中不足之分有之候間、不得止事聖經中より耶蘇之語を引用し答弁に及候旨申述候間、私より向後之処精々注意可仕旨申渡置候」(『同志社百年史・通史篇一』一〇四頁)と。

また余科についても、府学務課の「同志社視察記」第三回(明治一二年九月)には、「所謂余科ナル者ハ課外ノ書或ハ経済学ヲ修業スル者ニ係ルト称シタリ(按スルニ経済学、心理学等ノ皆正課中ニ在リ則チ其余科ト云フモノハ専ラ聖書ヲ指スナル可シ)」とある。

新島先生の同志社創立の目標は、キリスト教を教学の基本とし、神学を核として構成された欧米の著名な諸大学を範とするキリスト教主義大学(学園)の形成にあった。しかしその理想の実現は、明治初年の政治・社会・宗教の諸状況の中で、なんと困難なことであったことであろうか。加うるに、聖書を教えることに重大な制約を負わされた学校に失望し憤激する宣教師や、熊本洋学校のL・L・ジェーンズ校長の推薦により同志社でキリスト教諸学を学ぼうと意気こんで入学しながら、右の有様に幻滅して不満を訴える熊本バンド三〇名の若者たちが、悪戦苦闘の先生の背後にいた。

このような困難な時期に、西京三公会が先述のように設立された。やがて第一、第三公会は合流して平安教会となり、第二公会は一八八六年同志社公会堂(チャペル)の完成により、同所に移って同志社教

会と名称を新たにして出発した。三公会発足当初の会員総計六〇名、余、ほとんどが同志社の教師、宣教師、職員、家族、生徒たちであり、第一公会と第三公会の仮教師は前述のように余科生であったので、事実上三公会の牧師は新島先生が兼務していた。先生は創成期の同志社の社長として教学の充実、人員整備、建物設備の新設、府庁との折衝に心身をすり減らしつつもなお講義と学生指導に当り、その上に三つの教会の牧会職を兼ね、まさに八面六臂の奮闘ぶりであった。また先生は、校務のかたわら、全国各地に弟子たちを伴って伝道に出かけ、多くの教会を設立している。その足跡は近畿一円のほか、中国、四国、九州、中部、北陸、関東、奥羽にくまなく及んだ。やがて、念願のキリスト教主義大学設立の運動が緒につくに及んで、そのための募金行脚が加わり、ついには先生の健康は甚だしく損なわれることとなっていく。

三公会の設立とその牧会、および全国規模の伝道旅行は、先生にとって定めし過大な重荷であったであろう。しかし、困難を極めた同志社創業の時期に当って、これらの牧会とキリスト教伝道活動とは、苦闘する先生に、そして同志社に、実は最大の精神的活力の源を提供したのであった。そのみならず、同志社がその根本的教育理念を確立せねばならぬ時期にそれらは無くてはならぬ土台の役割を果すこととなったのである。

冒頭に掲げた先生の「天国の鍵」と題する説教は、信仰こそが教会の礎であると教えた。先生の教会の本質へのこの洞察は同時に、キリスト教主義に基づく人間教育を標榜する同志社教育にとって、つねに変わることはない指針でもある。「良心の全身に充満する」ような教育を

追求するために、そのような「徳育」の基本を常に探究するために、また研究教育と行政経営のすべてに同志社の理念が満ちわたるために、この指針は大切にされるべきであると思われる。(大学神学部教授)



火種を分つ

新島の死

死の問題が広く関心を呼んでいる。人間の「死に方」が問われるという事は、結局「生き方」が問われているということである。「よく死にたい」という気持ちの裏には必ず「どのようによく生きるか」という課題が含まれており、生き方抜きに死は考えられない。「よく死ぬ」

などということはありえないと主張する人もいる。死は全て醜く、「格好いい」死に方などはないという少々ニヒルな見方も結構あるのである。どちらにしても様々な角度から「人間の死に方」には多くの人が関心を持ち続けてきた。中野好夫の「人間の死に方」が書かれたのは二十年前の事だし、「歴史読本」が特別増刊号「臨終の日本史」で百十七人の日本人の死を扱ったのは二年前のことである。

私はこの百十七人の中に新島襄が入っていないのは不思議だと思っている。私は新島の死は極めて象徴的に彼の一生と人柄を現しており、その死に結晶化された彼の思想をも見出すからである。

ただここで留意すべきことは、人の死は誰の場合も死ぬ人自身の記録によらず、周囲の人々の観察や解釈によるものであり、その記録は

時には主観的であり、拡大解釈であり、そして時折思い込みであったりするということである。

新島の死の記録がそうであるとは言わないが、私達は私達なりに新島が生きた一生を念頭に置いてその死の情景を描いてみてもよからう。必ずしも健康に恵まれていなかった新島は旅路において死の床についた。彼の心中には迫り来る死の現実と、目差している理想の実現と成就を未だに見ていないという焦燥感が入り乱れ、思いを重くしていたかもしれない。大磯、百足屋旅館に伏して三週間の新島の生活は、決して長かつたとは言えない一生の総決算を彼なりに試みたものであり、見事であつたと言わざるを得ない。和田洋一氏はかの寒梅の詩が新島自身の作品か、古人の言葉かはつきりしないと語っているが、力を抜いて庭の梅の木に目をやり、全てを見えざる神の御手に委ねようとする新島の心をこの詩から読みとることができる。

一八九〇年、死の二日前に妻八重子、小崎弘道、徳富猪一郎を呼んで筆記させた新島の遺言は有名である。それも朝五時半という時間に

深田未来生

である。私は十カ条の遺言は繰り返し同志社内でも読まれるべきものと考えている。創立記念の礼拝などでは「設立の旨意」が読まれるが、少なくとも教職員は一年一度、遺言中の同志社教育に関する五カ条を、声を出して読む必要がある。新島がいかに「真誠の自由を愛し」ていたか、活力ある精神をもつ人間の養育を目差していたか、それを新たに思い起しただけで、今の同志社が陥りがちなマンネリズムと奇妙な官僚主義は激しく揺さぶられるに違いない。

小崎にエペソ人への手紙三章を読んでもらったというのも意味深い。使徒パウロがローマの獄中からエペソの教会の人々へ書き綴ったこの手紙は、パウロの生涯の最後の部分に属するものであり、彼自身の生涯の終章のような形で綴られている。その中の三章は神の真理に預かるために「全ての人が「共に」「一つとなって」神の国を継ぐ者」となつて励み、生きてほしいというアツピール文である。そしてこの共なる生命を生きたるために様々な苦闘があろうが、落胆せず敢然と艱難に立ち向つてほしいとパウロは訴えているのである。

死を眼前にして新島はパウロの言葉に新たに激励を感じたのである。しかし、また同時に新島はパウロの言葉を借りて、同志社の将来を担つて立つ人々に励ましを与えようとしたと私は思うのである。J・D・デイヴィスの記す新島の最後に気負いは見られない。淡淡と思つて願いを語り、夢の実現のための構想を地図に記し、祈りを共にし、「平和、喜び、天国」と咳いて永遠の眠りについたという。こういうのを「良い死に方」と言わずにおられようか。すなわち「良い生き方」の地上での「実り」の時であつた。

私は同志社出身者ではない。しかし二十五年間に渡つて同志社に連

なつてきた者としてこの新島の死に深い感動を覚える。死を「火が消える」といつた表現で描くことがある。新島の場合、死は火種を分かつ出来事であり、彼の枕元に集つた者達も、京都の地で祈りつつ新島の病状のニュースを待ち続けていた学生達も、その心の内に掲げた松明に火を点された体験をしたといえよう。松明が同志社という学園を中心燃え始めたのは事実だが、また松明を掲げて東奔西走、志を決して青年達が新島から受けた愛人主義の実現に励んだのである。

新島の主張は明確であつた。「愛ハ人ヲ憎マズ、人ヲ克（よく）容ル（ゆる）。人ノ為己を棄ツ。故ニ此愛一度社会ニ入ラバ、一身ニシテ己ノ身ヲ愛シ、己ノ身ヲ毀傷（やぶ）セズ、一家内ニ及ビ、一社会ニ及、一国ニ及、遂ニハ他国ニモ及ベシ」というのである。愛国者新島の主張は当然日本に根差しながらも、ここに見る思想は地球を対象とし、今日という国際主義を根底に備えている。

今日同志社は新島が想像だにしなかつた規模になり、巨大な組織を持ち、複雑な体制が日常的な教育作業をすら阻む程堅固なものとなつてしまつた。それなりの理由はあるが、何か自由人が造り出す社会に相応しくない存在が多くなり、それそのものを問にくい雰囲気定着してしまつた感がする。私一人の不正確な観察ならばよいのだが、新島はよく死ぬためによく生きようとしたのではなかつた。しかし結果的に彼の理想を求めて徹して生きた生き方が、「よい死」に繋がつた。新島永眠百年を覚える私達が迫られているのは、今、同志社はこの社会と世界においていかに良く生きるのか、よくするためにどう働くのかという問いではなからうか。

(大学神学部教授)

新島襄と聖書

川西進

新島襄の書き遺した文章の中で、私にとり最も印象深い一節は、彼が函館の港から密かに船出して十日後に書かれた次の言葉である。

今日セーロールより借りたる耶蘇經典を読む事少許なり。実に帰郷之上再び父母に逢たる心地恰も如此かと思ハレ、心の喜斜ならず

新島にとって、聖書がすでにこれほどまで、懐しくてたまらぬ書物になつていたとは！

彼が初めて聖書に接したのは、これより一年余り前、江戸で蘭学を学んでいた友人の一人（杉田廉卿とされる）が、漢文訳の聖書の抜粋を貸してくれた時だったという。もちろんキリスト教禁制下であるから、新島は夜、親の眼を盗んでこっそり読む。その読後感を杉田や、同じ仲間であつた津田仙、吉田賢輔ら、若き俊秀たちと語り合うのは、どんなに心躍る一時であつたらう。残念ながらその模様を伝える資料は、津田仙の回顧談以外にほとんど遺されていないが、先に引用した

新島の言葉は、それらの日々を懐しみながら記されたものではないだろうか。

新島の「帰郷之上再び父母に逢たる心地」という一節は、彼が、はや大分ホームシックになつてゐることをも窺わせる。事実この前後の日記には、望郷の念を洩らした言葉が繰返されている。国外脱出は長年の夢の実現だつたとは言え、またもとより苦難は覚悟の上とは言え、異国の船にただ一人、行く先も定かならぬまゝに乗りこんだ彼が、不安で一杯であつたことは容易に想像できよう。そんな時に、武士の身分でありながら、いきなり船長の下僕の仕事をさせられたことは、大いに自尊心を傷つけた、肉体的な苦痛よりも、心理的な屈辱の方が堪え難いことであつた。乗船後一週間目の日記には、こう記されている。

今は襦半三枚を洗ふ。我家に在し時自衣を洗らわす。然し今は学問之為とは申ながら、自ら辛苦を知るは是又学問之一と〔諦〕らめり。乍去父母をして此辛苦を知らしめば必ず四行の涙潸々ならん

武士の長男という身分が何の価値も持たぬ、未知の新しい人間関係の中に放りこまれて、彼はいままで彼を保護し、支えてきたものへの愛惜の念に駆られる。その時に彼を慰めてくれたものが聖書だった。それは単に彼が愛読していた懐しい書物であったからばかりでなく、そこに、これまでの儒教的な身分関係に代るものを見出したからである。だから「再び父母に逢たる心地」がしたのであろう。

事実、後に新島自身が、函館出航の一年三月後ボストン港に着き、船主ハーディーに提出した「脱国理由書」と、後年ハーディー夫妻に送った回想録「マイ・ヤンガー・デイズ」のなかで述べている通り、新島が聖書に見出した最大の教えは、神が天地万物の創造主であり、自分を造つたのも神であつて両親ではない、という考え方だった。新島の言葉によれば

神をわが天の御父と認めた以上、私はもはや自分の父母にわがちがたく結ばれているとは感じなかつた。……私は地上の両親よりも一層天の御父に仕えなくてはならぬ。この新しい考えが私を力づけ、私は断然藩主を見棄て、また一時的に家をも祖国をも離れる決意をしたのであつた。(北垣宗治氏の訳による。以下も同じ)

キリスト教の神が、これまでの行動の規範であつた忠孝の絆から彼を解放し、神を父とし、主とする新しい親子主従の関係の中に迎え入れたのである。これが、新島の国外脱出を促した力であり、同時にまた脱出後の彼を支え、護るものとなつた。冒頭に引用した日記の一節は、このような内心の消息を反映したものであろう。

以後新島は、言葉だけでなく象徴的な行為によつて、新しい神との関係を緊密なものにして行く。函館出航一五日後に断髪、約一カ月後、上海で乗換えた船のテイラー船長に長刀贈与、約六カ月後には小刀を同船長に売却、その金で漢訳の新約聖書を香港で購入、といった一連の行動がそれである。

こうして新たに父となり主となつた神は、新島にとつて何よりも愛の神として臨む。彼が聖書に見出した最大の慰めの言葉は、「ヨハネによる福音書」三章一六節の「神はそのひとり子をお与えになつたほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである」だつたという。彼はこの聖句を、アメリカでつけ始めた日記帳の扉に書き、その反対側のページに

主よ、あなたは暗黒の中から私を選び出されました。愛する両親を捨てた私をここへ導いて下さいました。その間、ハリケーンにも嵐にも会うことなく、常に良風を送つて、安全に無限の大洋を通過させて下さいました……。

と、神への感謝の祈りを記した。それは、その日までの波乱と辛苦に満ちた人生の旅路を振り返つた時に、心中から溢れ出る感慨であつたろう。見えざる神の愛の導きなしには、この日、この時があることは考えられぬことであつたろう。新島のその後の様々な活動の中心には、A・S・ハーディーが述べているように、この「人間に対する神の愛の確信」が、不動の岩のように存在していたのだと思う。

(東京大学教養学部教授)

「設立の旨意」の年

木 枝 燦

一九八〇年の夏、私は西独北部ゲッチンゲンに滞在していた。連日冷たい雨が降って寒く、七月に暖房がはいり熟した桜桃が凍えてはじける程であった。それは一八八八年以来とのことで、生涯忘れられない冷夏であった。この一八八八年という年は強く記憶に残った。

その一八八八年二月末のある日、吹雪に埋まる南仏アルルの駅に降りたった一人の男があった。ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ、炎の画家である。生前その作品はたった一枚しか売れず、死後によく名声をえた彼の傑作は、この日から二年半にわたる狂的な創作活動によって生み出されたのである。

同じ時期、アルルの東七〇軒にあるエクス・アン・プロバンスではポール・セザンヌが静かに描き続けていた。近くにあるサント・ヴィクトワール山の風景が何枚も描かれている。この山はもともとプロバンス語でヴァントウールと呼ばれていた。

そのヴァントウール山の北七五軒のところにフランスの最高峰ヴァントウ山がある。前者は標高一〇一一、後者は一九一二米である。「昆

虫記」のジャン・アンリ・ファーブルはしばしばこの山に登ったが、その二三回目の体験を面白く書き誌している。彼は貧困と不運に苛まれた四十年にわたる苦闘の末、ようやくアルマスの荘園を手に入れ、注目の一八八八年は静かな研究生活にはいつて五年目であった。アルマスはアルルの北六〇軒の荒野の中にある。

人嫌いのファーブルにしては不思議であるが、その苦難の時期のあるとき、アヴィニヨン（アルルの北北東三〇軒）に滞在していたジョン・スチュアート・ミルと親交を結んだ。帰国してヴィクトリア女王の下院議員となつて活躍していたミルに、ファーブルは三千フランの援助を仰いだことがある。ミルは最愛の妻との思い出の地アヴィニオンで死んだ。

焦点の一八八八年当時、ヴィクトリア女王治下の英国は、「世界はわが農場、イギリスは世界の工場」と称し、世界帝国を自負して繁栄の絶頂にあつた。女王はインド皇帝をも兼ねていた。しかし一方では富の偏在により本国内での犯罪も増加していた。ロンドンのペイカー街

二二一番地Bを根拠地として、シャロロック・ホームズもまた活躍せざるをえなかったのである。ホームズのみき伝記作者、好人物のワトソン医師の夫人は流行のジフテリアによつて急死したので、ワトソンは再びベイカー街に戻っていた。多分一八八八年の一月ごろであろう。一方、同年四月以降十一月まで、ロンドンのイースト・エンド地区では次々と恵まれない女性が惨殺される事件が起こった。いわゆる切り裂きジャック事件である。この年の十月二三日にはポール・ゴーガンがアルルにゴッホを訪れて芸術的な共同生活を始めた。それは長くは続かず、丁度二か月後、争論の末ゴッホは狂ったように自らの左耳を切り取るのである。

時の流れを切断してこの一八八八年十一月の断面を覗きこむと、そこには私の好きな人物、ゴッホ、ゴーガン、セザンヌ、ファールブル、それにホームズとワトソンが見える。實在の四人は実に南仏プロバンスの半径五〇軒の円内に生きていた。

目を転じてアルルの東遙かに一万二千軒を隔てたわが国ではどうであったか。そこではようやく政治体制が整備されると共に、自由民権運動、鹿鳴館に代表される欧化運動、それに続く反作用として国粹主義が頭をのぞかせてきている。その様子は唱歌にもはっきり見てとれる。スコットランド民謡 Comin' Through the Rye を原曲とする「故郷の空」、フォスターの Old Folks at Home による「あわれの少女」のような抒情的なものが発表されるかと思えば、「紀元節」では、「…空にかがやく日のもと、よろずの国にたぐいなき」皇国を守るため、「…死すともしりぞく事なかれ、皇国のためなり 君のため」と「来れや 来れ」は国粹主義を鼓舞している。いずれも一八八八年に世に出

た。明治二一年である。

同じ年、落語家桂藤兵衛はオツペケペー節を呼び物にしていた。それを壮士芝居の川上音二郎は時勢諷刺の歌詞に改めた。例えば、「…娘は当世の束髪で、言葉は開化の漢語にて、晦日の断り洋犬抱いて、何んにも知らずに知った顔、むやみに西洋を鼻にかけ、…うわべの飾りはよいけれど、政治の思想が欠乏だ、天地の真理がわからない、心に自由の種をまけ、おっぺけべっぼう、べっぽっぼ」というのである。「君方代」が国歌に制定されたのも一八八八年であった。

そして、正にこの一八八八年十一月、「同志社大学設立の旨意」が全国主要紙に発表される。新島先生の胸中に温められ、アメリカン・ボードの第六五回年次大会で声涙共に下る演説によつて世に現われたキリスト教主義の私立大学は、十四年を経てここにその果たすべき高遠な理想を美事な文章を通して世に慫えたのである。

新島先生の最後の苦闘が始まる。翌一八八九年十月、礼拝堂に集まった学生の前に先生は羽織袴に威儀を正し、遺命の挨拶をされた。自分は「設立の旨意」実現のため病の身を押し、勸説の途につくが、斃れて後もなお已まぬ覚悟である。諸君はよくわが志を継いで欲しいという趣旨であった。そして上州にて倒れ、大磯むかで屋で遂に「旨意」に殉じられたのである。東京日日新聞を見ると明治三年一月二四日（金）に先生の長逝を報じ、

「新嶋襄氏相州大礎に於て病氣の處療養不相叶遂に本日午後二時三十分就眠致候云々」と三日付中村栄助、徳富猪一郎らによる死亡広告が掲載されている。天は先生にファールブルの寿を与えなかった。まことに残念である。

(大学工学部教授)

新島襄の教育学的信条

森 章 博

新島襄先生永眠一〇〇年にあたり彼の「教育学的信条」(Pedagogic Creed) というようなものについて日頃感じているところを述べたい。

彼は教育家であり同志社の創立者であるが、教育学者ではない。従って彼には教育的信条はあり、それについては、彼自身の文章に見出すことが出来るだけでなく、直門に依つても伝えられている。例えば、明治二十一年(一八八八)の「同志社大学設立の旨意」は、先生の教育的信条を披瀝したものに徳富蘇峰が加筆したもので、日本教育史上、大いに斬新なものであり、教育宣言ともいえる。

客観的にみて、教育学と教育との厳密な区別がなされている場合、他方、両者がしばしば混同され区別されていない場合がある。新島先生は、知識を運用する品行と精神とを養成するには、基督教主義・活力のある基督教主義でなければと確信された。彼の教育的信条は、基督教を、教育という形態で發揮していくことであつた。彼は、教育を宗教との観点からみて、両者が補足関係にあることを強調し、基督教主義を徳育の基本とする学校を経営した。従つて、彼の教育的信条は、

教育は実践を主体とすべきものとしながらも、そのみではなく教育の目的そのものを重視させるといふ教育学専門の概念規定にも適合するものであると考えられる。彼が実践した伝道の業績から考えて、私は、彼には「教育学的信条」があつたのではないかと感じている。彼は、教育と伝道(宣教)、学校の役割と教会の任務との別をよく考えた。従つて、同志社の教育は、基督教拡張の手段ではなく、伝道師養成にも限らないという立場から、基督教主義人間教育を理想としたと思う。彼のこのような理想は、教育的信条によるものというより、「教育学的信条」と考えてもよいのではないかと思う。教育学の主題は教育であり、教育を考究する理論であるとする概念から考えて、基督教を凡ゆる教育の必要不可欠な基礎とした彼の教育観は、教育学的にも高く評価されるものであろう。

彼は、欧米先進諸国の教育や文明文化の根源に基督教があることを学び、とくに米国で勉強した約一〇年七カ月間に得たピューリタニズムの理想から大きな影響を受けた。彼の宗教・伝道については、その

宗教関係演説や説教稿などで窺うことが出来る。彼は、教会の礎は基督を神の子と信ずる信仰が不可欠であると信じた。同志社礼拝堂の礎式で、教育は宗教と密接な関係にあり、教育の基本は宗教にあるといつてもよい旨述べている。彼のこのような信仰に基づいた宗教観の上に、彼の教育精神が形成され發揮されて、宗教教育乃至徳育を基本とした「教育学的信条」となったと解釈してよいと思う。

さらには、新島先生の教育家としての「教育学的信条」の独自性が何であろうかを問う必要がある。私は、同志社大学に職を奉じて三〇余年を過ごして来たが、今なおそれが明確に答として得られていない状態である。就職して間もなく、「明治八年『官許同志社英学校』創設の教育史上の意義」という拙文を発表し、並びに徳富蘇峰の研究などを通じて考えて来たが、未だに纏まった私の新島観に基づく、教育家としての先生の全像を把握していない。長年に亘り、新島学として先生を位置づけ、思想と業績などを極めて緻密に研究して来られた森中章光先生のことを思う時、先生から多くの教示を得ながら、なお、新島先生の全像を把握するには未だ道の遠いことを痛感している。

森中先生が終生の師として仰がれた徳富蘇峰先生については、私も彼の教育理念や民友社の教育論について数篇の論文を発表したが、その研究過程を通じて徳富の新島理解から教えられたことは多かつた。私は、徳富蘇峰の教育精神を理解するにしても、彼の新島眞先生永眠前後の新島把握にしても「国家」をどう考えていたかが重要であると考えている。徳富蘇峰の教育精神が、究極的には天皇中心の国家主義論理で一貫し、国家発展に役立つ国民の育成にあったことを考えるならば、新島先生とはどの点が共通であり、どこが相異していたのであ

らうかを真剣に究明する必要があるのではなからうか。私は、新島先生は常に既に成組織から自由になることで、よりよい組織を創り出すエネルギーを持ち、矛盾、試練、障害、困難などの連続の生涯において、逆境への勇氣と力を示された方であると思う。強靱な意志力というか心意気とでもいってよい原動力があり、それは前述の彼の基督を神の子と信ずる信仰から發露したのであろう。彼が脱藩し、密航し、滯米中回心し、帰国後も民間人として基督教主義的教育を実現したのも、皆、その根底には生成發展、希望・前進の原動力となりうるものが神より与えられたのではないか。要するにこれらのエネルギーの基礎には彼の信仰があり、それが一貫した「教育学的信条」を生み出させたものと思われる。

新島先生は、確かに他の基督教的教育家に比して、憂国の士であったが、彼の愛国精神は偏狭なものでなく、基督教的人類愛と密接したものといわれて来た。先生の永眠後、時勢は推移し非常に大きく変化し、とくに、国家にとって危急存亡の時を迎え、遂に、第二次世界大戦でわが国は敗戦するに至つたのである。日清、日露兩戦役はじめ、いわゆる十五年戦争は、先生が昇天された後のことであつた。

私は、歴史人物の研究において「若し」ということが許されるならば、先生が生きておられたなら、どのように決断されたかが問題となると思う。先生永眠一〇〇年を迎えるにあたって、今日的な課題である「国家と人類」「戦争と平和」などについての新島先生の考え方を、彼の人間像から見出ししていくことが重要であると考える。そのことが彼の「教育学的信条」の独自性を追求する道にもつながるのである。

(大学文学部教授)

「新島研究」に思う

何しろ昭和十九年入学以来、「校祖新島襄先生」についてはそれこそ耳にたこの出来る程たびたび聞かされて、一種の新島アレルギーにかかってしまい、一通りの伝記はさておき、本来のお人柄なり、日本の教育思想史の上での彼の位置なりについてはあまり深く考えもしなかつたし、すゝんで調べて見ようともしなかつたのである。

それがいろいろな機会に恵まれて、学生諸君を連れて再度函館キャンプに参加して波打際の「脱国の碑」に対面したり、アームストロング・ジョンソン・チャペル正面の壁の肖像画に「拝謁」したりしている内に、次第に私なりに関心が湧いて来ているいろいろな「新島論」を少しづつ読み始めたのがこゝ数年、と云うわけである。

短い学徒動員と学徒出陣を別にすれば、ざつと四十五年間、同志社の「はえ抜き」ではなかった「飼い殺し」の人間と至しましては誠に申しわけもない所なのであるが、これは何も私だけの怠惰のせいばかりではなく、定型化した「新島像」を神聖化して取上げようとするムードのもつ押し付けがましささに無意識に反発していたせいもあるう

か、と思う。

村井実慶応義塾大教授の『もう一つの教育』（小学館）から引用して見よう。

「従来は学問をするといえれば自分が立派に人間として成長するためにはとほ考えないで天下国家のためにするのだと考えて来たがそれは間違いだつたと云うのです。いたずらに大言壮語するだけで自分自身の素行がおさまらないという事もあつたでしょう。又、天下の事をわがことのように考えるところから逆にわがことを天下国家のことと思ひがちがえて独断や独りよがりになることもあつたでしょう」。それが新島においては違つていた、と先生はおっしゃる。「新日本を開くべき『私的関心』と云うのが新島のアメリカへの関心の他の多くの留学生たちのそれとちがいに成つていたと思われるのです。云うまでもなくこゝに云う私的関心とは何もエゴイステイックな動機をさすものではなく、己の良心に照らして何等恥ずる事なき行動原理が学問をするものの基本的姿勢でなければならぬと云う事であろう。

宮井 敏

こゝに従来の新島像のとらえ方の盲点がある。もとより新島が「憂国の情もだしがたく、脱国して渡米した事実にはあるまい。だがその動機は従来強調されて来たように「真に日本男児として国家のために寸力を竭さんとする愛国の丹心燃えて止み難く」と云うような戦闘的国士型のナシヨナリストとしてではなく、むしろ「勉学指向型青年として物質的文明の摂取よりは精神的文化の習得にあつたと云うべきではなからうか。」(伊藤弥彦法学部教授「新島襄の脱権」同志社法学第二〇〇号)

今年十月に発行された「明治という国家」(日本放送出版協会)の中で司馬遼太郎氏は若き日の新島の肖像とアームストロング外景をグラビアで紹介したのち、ラットランドの伝道教会の年会(グレイス教会での伝道協会の年次大会のこと)でのあの有名な演説について詳しくのべ、欧米視察団(大久保利通、伊藤博文ら)のうち、木戸孝九の通訳としてアームストロング大学を案内し、お隣りのマサチューセッツ州立農科大学に札幌農学校で内村鑑三、新戸辺稲造、を育てたクラーク学長をおとづれ紹介したくだりを取り上げている。同氏によれば木戸はこの時、新島が文明開化かぶれもアメリカかぶれもしていないのにおどろき、日記に、「彼の厚志・篤実、当時軽薄・浅学之徒、漫に開化を唱ふるものとは大いに異なり、自ら旧知のごとく、その益することすくなくならず。後来、頼むべきの人物也」と書いている、と云う。こゝにも、明治国家と云う近代社会をつくり上げた強烈な個性の持ち主の中にまじつて、新島がその物静かな、権勢欲のない、真摯な性格のゆえにかえつて光り輝やっていたのがうかがわれるのである。

新島を支えた多くの初期の同志社人の中でも良かれ悪かれ強力なエ

ネルギー源であつた熊本バンドの人々の中には、始めの頃はいわゆる「肥後もつこす」特有の豪傑気取りの壮士タイプが少なからず居たであろう事は充分想像出来る。徳富蘆花の「黒い眼と茶色の目」の中には彼等の活躍ぶりが生き生きと描かれている。今、熊本市内に残る質素な徳富旧邸の屋根上からすぐ近くの熊本洋学校への焼き打ちを恐るおそれて居た蘆花のちに兄蘇峯をたよつて上洛した頃にはまだまだそうした気風が校内に強く残っていたものであろう。けれども、氣おしい立つ悍馬を乗り鎮め、精神的感化を少しづつ着実に及ぼして行つたのも、やはり新島の非政治的良心的教育者としての信念であつた筈である。昭和三十年、九十三歳にして最後の母校訪問をした蘇峯が、生涯にわたる左右にぶれた思想的遍歴とかゝわりなく、終生変ることなき「新島先生」への敬慕を咄々と語っていた事は今なお記憶に新らたなものがある。

結局、新島の求めた青年像は丁度自分自身がそうであつたように、「近代国家に必要な人間とは国家に無主体的に盲従する臣民ではなく、天皇や国家の權威から独立した自治自立の人民」(井上勝也文学部教授「教育者新島襄」文化学年報第三七輯)でなければならなかつた。そのためには「天皇を頂点とする国家に忠実な有機体の一部をつくる国権最優先のそれではなく、個の自覚、良心の自由を尊重する民権重視の立場に立つ」(前掲書)教育が不可欠であつたわけである。

つぎまるところ、千百の議論を越えて新島の教育理念、従つて同志社の基本方針は唯一つ、一行の「良心碑」の文言につきる、としみじみ考へる今日此の頃である。

(大学商学部教授・法人評議員会議長)

新島襄と同志社女学校

宮澤 正典

同志社女学校の始原はどうだったのか。新島襄の英学校に対して新島八重の女学校とおくと座りがよいのかも知れない。そのように書かれたものもある（たとえば『読売新聞』が一九八四年に九回連載した「同志社高女」は「新島夫人が開く」と起稿していた）。

しかし、あらゆる記録はそうではないことを示している。開業は同志社社長新島襄によってなされ、少し後になって同志社女学校校長というときにもかれの名だし、女学校の外国人教師雇入の難渋に対処する熱心は並なみならぬものがあつた。それにもかかわらず、新島が女学校創設にイニシアチブをとったようにはみえない。また英学校や大衆設立のためになされた日本教育史上にも貴重なマニフェストに対応するような、女学校設立の趣旨を内外に示したとも思えない。残念ながら、新島には女子教育について一読了解できるようなまとまつた形で書き残したものはない。

それではどうして同志社女学校なのか。じつはジェローム・J・デイヴィスを欠いては同志社女学校はなかつたのではないか。新島の同

志社英学校設立計画に賛成して協力したのがデイヴィスであり、同志社に女学校を設けるべきであるというデイヴィスの計画に賛成して尽力したのが新島であつた。実際面で山本覚馬がこれに加わる。したがって、女学校の必要性についての熱意の表現はデイヴィスの方がより具体的積極性があつた。

デイヴィスはすでに神戸で一八七三年以来E・タルカット、J・E・ダッドリーによる女性のための私塾神戸ホーム、寄宿学校（神戸女学院の前身）の成果を身近にいて支援した経験をもっていた。新島もアメリカン・ボードのN・G・クラーク宛書簡でデフォレスト夫人エリザベスの教育活動を評価して「私たちの仕事のため合衆国がより多くの、彼女のような女性を割愛してほしい」旨をしたためている（75・1・25）。しかし、一般的願望であつて、それを自らつくろうとする学校と結びつけて具体的要請としていたわけではない。デイヴィスはタルカットらと同種のガールズ・スクールを大阪京都にも設けることを企て、これに応えるかのように京都に女性のためのクリスチャ

ン・スクールを早急に開きたいという意図をかれに伝えたのが山本寛馬であった。デイヴィスはこれらの経緯を知らせるとともに、日本伝道における女性のための仕事が必要と女性によって為されるべきであることを訴えた(75・7・10)。さらに一八七六年一月二日には、年初の山本八重の受洗、新島との結婚を伝えるとともに、京都に女学校開設の予定を報告している。同年四月のアリス・J・スタークウェザーの来日はこれらに応えたものであり、彼女が同志社女学校の最初の教師となる人である。京都御苑内の旧柳原前光邸のデイヴィス宅に寄留して、秋にはそこで生徒と寝食をとむにする私塾をはじめ、新島夫人がこれに加わったのであった。デイヴィスは彼女の来日後も、神戸大阪の女学校を勘案して必要な女教師の数をはかり、京都に女学校をたて、近郊の三百万の女性のためにすこしでも伝道をしようとするなら、四人ないしそれ以上の女性宣教師がなければならないなどと綿密な構想をたててボードに訴えている(77・2・20)。

一八七七年四月に開業した女学校はそのはじめ、正式名称は同志社分校女紅場であった。のちにM・F・デントンが初期の同志社女学校について、デイヴィスの熱望していたのは a fully equipped woman's department in the Doshisha であつたと書いているのと照応する。デイヴィスの気分としては、京都における女性のための強力な寄宿学校でもあつた。ともあれ、かれはスタークウェザーに同志社女学校の巨細を報告し、その拡充のための物心両面の援助をアメリカン・ボードに求め続けた。これらの事情は近年、仁井国雄、森永長彦郎、井上勝也、坂本清音ら諸氏によって手書きの宣教師文書が読みすすめられるようになって確かめることができる。

同志社英学校は、新島デイヴィス山本の意気投合の作品であつたが、女学校もまた然りであつた。一八九〇年、新島の没した年の秋、女学校に就任し、翌年から教頭(明治期には事実上の校長職)を勤めた松浦政泰は、デイヴィスを追悼して「余が曾て同志社女学校を代表し、先生の宅でアメリカンボールドの委員と重い英語で談判を試みた時、先生は終始余の味方となつて折衝の労を執られた」(『追悼集』II)と述べている。新島に先立たれてからも「同志社と共に喜び同志社と共に悲しみ、至誠一貫」(波多野培根)倦むことのなかつたかれの女学校護護のさまがうかがえる。

さて、新島があらかじめ女子教育に限つて語つたことは皆無と言つてよく、その教育観は書簡やかれの「人種改良論」のなかから拾つて推し量るといふアプローチが従来なされてきたように思う。同志社女学校設立の経緯も右の通りであつたとすれば、新島にとつて女学校は何だったのか。

当時、京都府当局の新島と同志社に対する疑念反感はいちじるしく、一八七七年秋、スタークウェザーの次の女教師J・ウィルソンとM・F・パミリーを迎えたが、府はその雇入許可を遅延させ、徹底的に妨害した。謀者による探索書には「嗚呼新島裏ノ陰謀ヤ己レ皇国ニ生レナカラ外国人股肱トナリ国ヲ売ルノ所業ヲナス自己一身ノ上に止マス漸次多数ノ男女子ヲ誘ヒ外人ノ恩ヲ蒙ラシメ忘国ノ不民ヲ蕃殖セシメント謀ル」(77・8・1)云々とか、「盛ニ女子ヲ集メ専ラ女学ニ力ヲ入レ」(同20)という記述からも、その背景をうかがうことができる。さらに、女学校の用地取得に関して「新島襄帰朝之頃ハ只一介之書生ニ有之結社人山本寛馬ニライテモ無財産ノ貧士族而者何ソ大金ノ貯蔵ア

ル謂レ無之然ルニ明治八年該社設立以来今日迄ノ経費ヲ予算スルニ別紙之通万以上大金ヲ探出スヤ貨幣偽造ヲナシタルカ將盜金ナシタルカ」とまで言つたうえ、それが米国耶穌会社の出金によるもので、「彼等耶穌会社ノ奴隷トナリ」、「皇国ノ大切ヲ忘レ新島カ如キ不忠不義ノ売国者」⁷⁶、「国賊モ亦甚シ」、「就テハ向後新島山本等陰ニ出金スルモノハ假令陽ニ条理アルモ買得御許可無之様致度此段申上候」⁷⁷（78・4・26）と報告していた。新島はこうした府との折衝の一方、外務卿寺島宗則に訴える書簡を送つた（76・2・28）。このなかに新島の思念が簡潔に示されている。

首ヲ回シテ女子社会ヲ観レハ窃カニ懐ニ悵然タルナキコト能ハズ、是ニ於テ女子モ亦教育ナカルベカラサルノ説ヲ主張シ、去歲四月ヲ以テ更ニ女学校ヲ設立シ米國ノ婦人ヲ招キ教訓ヲ委託セリ、近来ニ至テ又其盛大ヲ冀図シ新ニ校舎ヲ経営シ数月ヲ出ズシテ工ヲ畢ラントス、因テ更ニ米國女教師兩名ヲ招カント欲シ本年一月九日ヲ以テ願書ヲ京都府ニ出シ、外務省ヨリ女教師兩名寄留ノ免状ヲ下附セラレンコトヲ謂ヘリ

と述べて、京都府が「外務本省ヨリ未下附」と対応し続けるのに対し、「文明駛進ノ我カ政府ニシテ至貴至重ノ時晷之ヲ視ル塵芥齋ナラサルハ裏ノ解セサルトコロナリ、嗟呼下民ヲシテ一去再ヒ還ラズ最モ愛惜スベキノ時日ヲ空フシ、日夜指ヲ屈シテ命ヲ待タシムルハ明政府ノ一大疵瑕ト謂ハサルベケンヤ」と抗議した。三月には上京して田中不二郎、寺島宗則に面会を求めたがかなわず、富田鉄之助に交渉を托して上州伝道に向つた。

結局、パームリー雇入はようやく翌々年の一八八〇年六月に許可さ

れたが、ウイルソンはこの年には帰国している。これらを通して、新島は女学校必要の認識をより固めていかなかっただろうか。かれが心血を注いだ第一義的な教育機関は英学校であり、次は大学設立であつたことから、女学校は副次的であつたとみざるをえまい。ジャパ・ミッションも決して英学校と同じだけ力を入れることはなかつた。女学校の校舎建設についての消極的態度や、やがて女学校廃止を決めて女性宣教師を引き揚げた、いわゆる明治一八年事件は、幅淺した背景のあつてのことだが、そのことを物語っている。

しかし、新島が女子教育をなかがしろにしていまいなどと考えてはいなかつたことは間違いない。かえつて困難に直面してそのありようを明瞭にしていた。しかもそれは狭く同志社女学校のみではなく、神戸女学院や梅花女学校に赴き、「女学校設立と女子教育の大切なことを演舌」し、あるいは「同志社両校、又大坂神戸等ノ女学校ノ為ニ祈禱会ヲ設ケ」（同志社記事、⁸⁰・1・20）するなど、相互の発展を祈り、支えあふ伝統をも築いていた。晩年にも、前橋の共愛女学校設立にあたって、卒業生不破唯次郎の相談に応じ、またその発起人依頼に對して「女学校之事ハ大ニ賛成仕発起人之中一人ニ相加候事ハ甚望ム所ニ有之候」⁸⁹（89・4・22）と賛同している。

新島門下から枚挙にいとまがないほど、すぐれた女子教育者やその擁護者の輩出したのは決して偶然ではない。彼らについては稿を改めなければならぬが、新島の同志社における女学校の営みをみることにし、それらの人材の存在はなかつたのではないか。女学校そのものをこえて、慶応義塾や早稲田が比肩できない、そういう側面をもつていたのである。

（女子大学教授）

百年前と今

一、

同志社女学校の初代校長・新島襄の永眠によって女学校はどうなったのか、ということは同志社女学校史を専門に研究されている方々にはそれなりのご意見があるであろう。

しかし、ごく一般的にみて苦難と新展開の歴史は語られなければならない。篤信の徒であり、行政家であった山本覚馬が臨時の総長を引き受け、女学校長も引き継いだ、学校の運営そのものは幹事・大沢善助が教頭役をその三年半前（一八八六年九月）よりつとめていた。そして新島永眠の年の秋（九月）には松浦政泰に確実にその教頭役はバトンタッチされた。彼は同志社英学校卒業後、郷里松山に塾を開き、また神戸、大阪（泰西学館）などで教えていたが、一八九〇年東京に野望を抱いて向う途上、京都にて小崎弘道（校長）に新島没後の同志社女学校教育をまかされた人だとされる。松浦は「同窓会」の設立者の一人として知られるが、後には日本女子大学で高等女学校主事をつ

とめるなど生涯を女子教育に捧げた人である。彼もまた一粒の麦、新島襄先生永眠によって実を結んだ教育家の一人である。

松浦政泰を中心に理想をめざす教育内容とは別に当時の財政難は相当なものであったとされる。『同志社女学校の百年』（女子中高篇）には「明治二十三年、女学校再び財政困難時代、卒業生・関係者相寄り女学校資金募集を企てる」と記されている。

すなわち、この時の女学校は予備科（三年）と本科（四年）および高等科（一年）というコースをもっていたが、この年限を縮少し応募しやすく経費も減じながら、しかし教育の質は高めようと松浦らは苦心した。「明治二十五年六月、本科課程を変更して普通科の学年を短縮し、豫備科一年、普通科四年とし、その上一カ年の専門科を加へ、さらに専門科を分けて師範科、文学科および神学科の三部とした。別に豫科の下に一カ年の補習科を置き大いに入学者の便を計った」（『同志社五十年史』一一七頁）という状況がうかがわれる。

そこで問題の生徒数は創立時（一八七六・明治九年）は九名であつ

武 邦 保

たが、十四年後、新島永眠の年には一二一名になっていった。これが翌年から減少し始め、九六名(明治二十四年)、七八名(同二十五年)六八名(同二十六年)となつていった。

もちろんその全てを新島校長の永眠の一事にかけるわけではないが、そのような経過はどうみたらよいのであろうか。ちなみに百年後の今日をみるに、女子中学・高等学校一、五三〇名(うち中学六九二名、高等学校八三八名)、女子大学四、二三四名(うち短期大学部一、〇七一名、大学院二八名)という状況である。

新島は大阪の沢山保羅の梅花女学校(明治十一年創立)に、沢山永眠(一八八六)後招かれて語つたという中に有名な「女子教育ハ社会ノ母ナリ」とうたい、

「我輩信徒カ如斯女子教育ナドニ従事スルハ、全(一)教育ヲ名トナシテ教育ト云フ網羅ヲ張り、天下ノ婦女子ヲ此ノ網羅ニ入レ(基督)教ニ引込ムナリト、成程陽ニ左様ニ見ユルモ知レヌ、然シ基督教ニハ広(二)人ヲ愛シ隣ヲ愛(セ)ヨト云教カアレハ、随テ信徒中ニ社会ノ改良ヲ計ルノ精神ヲ発達セシム、此ノ精神發達スルヤ社会改良ノ基ニ着手セサルベカラス」(『新島襄全集』一卷四一九頁)

と講じている。おそらくその後間もなく新島も永眠した。今日、キリスト教女子教育によって自己を確立し、社会の改良(改革)に献身する人々の何と多くあることか。ここにも新島襄の先駆的役割と預言者性を認めることができるのではあるまいか。

二、

知られているように、新島襄永眠の年は日本の近代国家が制度的にも誕生する年であった。

近代国家の欧米を旅すること二回、彼はそれが何かを知っていた当時まれな日本人の一人であったが、国会や大日本帝国憲法につき、教育勅語につき新島襄の所見を聞きたかつたと思う。

自由と自治の精神で学園にも教会にも具申、建議した新島は、まず一八八四(明治一七)年の渡欧を前に東京で「不平等条約改正」についての私案「条約改正ヲ促スノ策」を草している。また同時に私立学校(男子校)へも改正徴兵令の特典(徴兵猶予)を与えるよう伊藤博文首相に具申したとされている。

そこで世間では生徒を網ですくうようにキリスト教に入信させていると批判されていることを承知している新島は、この「条約改正ヲ促スノ策」においても日本人が「有爲の外国教師」を招いて「キリスト教主義ノ学校ヲ起シ、先ツ其ノ生徒ヲシテ之ヲ信奉セシムノ法ヲ設ケルニアリ」として単に近代西欧科学の知育偏重ではなく、「神ヲ敬シ人ヲ愛」する人物養成の訴えに落ちついでゆく。この訴えは彼の最晩年(明治二十三年)に文章として完成された(魚木忠一「新島襄」一八八頁)とみられる。新島にとつては自由も平等も外交交渉によつてではなく、自然に恵みとして与えられるようにすることであった。

まこと、新島襄は「明治憲法」も日本国憲法も知らずに永遠の眠りについている。彼の叫びを聞きたいと思う。それはおそらくイエス・キリストの死が「開拓的」な人類救済の出来事であつたように、新島襄の永眠も今日の同志社を拓く第一の石づえになつたのである。

(女子大学教授)

佐伯理一郎と新島襄

長門谷洋治



佐伯理一郎

岩沢ノ小女バプテスマヲ受ク。青江秀、岡部長職君ノ二氏来ル。(略)
とある。佐伯が新島の姿を近くに見、その声を聞いたのは恐らくこれが最初で、かつ唯一の機会ではなかつたかと思われる。また新島は多分生前に佐伯の名を知ることとはなかつたであろう。

(二)

(一) 医師佐伯理一郎(二八六二—一九五三、以下佐伯)はその『日誌抜萃』の明治一七年二月一七日の項に「新島襄氏ノ熱心ナル説教ニ感ズ」と記している。一方、新島襄(以下新島 敬称略)の『出遊記』には、丁度その日の記載があり「十七日 此日ハ麻布ノ教会ニ至ル。小崎、

佐伯は熊本県阿蘇郡宮地村(現 一の宮町大字宮地)に生まれ、明治一一年八月開校の熊本医学校に最初の生徒の一人として入学、同一五年七月に卒業、一月に上京する。『日誌抜萃』(以下抜萃)にキリスト教との関連記事が見られるはじめは翌一六年五月一九日で「久松座ニテ宮川経輝ノ基教演説聞キ大ニ感動ス。小崎弘道氏ニ紹介セラル」とある。宮川経輝(一八五七—一九三六)は佐伯より五歳の年長であるが、彼も宮地の出身で兩人の生誕地の距離は約五〇米にすぎず、宮川進氏(現 一の宮町文化財保護委員長)は「二人は幼友達であつたと思われる」とされている。佐伯はすでに五歳のときに神官であつた宮川の父経連から習字を習っている。小崎弘道(一八五六—一九三八)



リンド・リチャーズ

五六―一九二〇)に会い、「基督教ヲ聴キ感ズ」とし、同二二日は市原盛宏(一八五八―一九一五)に会う。彼もまた熊本県の出身、熊本バンドの一人である。九月二〇日には大阪で宮川経輝の話に「大ニ信仰ヲ起ス」と記す。

一〇月一日東京に戻るが一〇日、本郷教会(石原・星)に出席、二三日には小崎弘道を訪ねている。その後も第一基督教會、明治會堂(ル―テル記念會)、聖書友會などに出、信仰のたかまりを感じたとする。一七年一月一七日、明治會堂での各派聯合大祈禱會に出、二六日築地の懇親會で内村鑑三と懇談。二月には神田の杉田玄瑞方に構義所が開かれたが、内村が最も勉強したと。

そして本稿巻頭、新島の説教をきくところに至り、三月一日には小崎弘道より受洗することになる。同三月「中旬、同志社ニリバイバル起ル。三一日夜ノ祈禱會ニテ我教會ニモ起ル」としているが、これが『拔萃』に同志社の語の出る初めである。

も熊本県の出身で、宮川とともにジェーンズより

受洗し、同志社英学校に学んだ。佐伯はこの二人との出会いから急激にキリスト教に近づいて行く。同年六月西下するが、八月一八日には(滋賀県)朽木で熊本医学校の時きの恩師 長田重雄(一八

(三)

のちにはジェーンズとも親しくなるが、在熊時代にはキリスト教とは直接縁のなかつた佐伯が、東京で幼なじみの宮川の話をきいて急激に傾斜、一〇カ月足らずで受洗。むろん宮川らを通じて新島の名は知っていたであろうが、東京で彼のなまの声をきいたのは佐伯の生涯に大きな転回を与えたといえよう。「熱心ナル説教ニ感ズ」の九字に、新

島の全人格が投影されているように思える。

宮川・小崎はもとより新島パターンの人であつた。佐伯は受洗した年の一〇月海軍に入り、一九年一月にはアメリカのフィラデルフィアにあるペンシルバニア大学に留学し、さらにドイツ・イギリスを経て、明治二四年四月帰国する。

(四)

このように佐伯は同志社で学んだことがあるなどという直接の同志社との関係はない。新島死去のさい、彼はべ



同志社病院

ルリンにいた。その彼が新島が非常に力を入れた京都看病婦学校に強くかかわるようになる。それも帰国まもなくの明治二十四年七月からであった。『抜萃』同月二〇日の項に「ドクトル・ペリー同志社病院ニテ働く事ヲ約束ス」と記す。佐伯とペリーの仲介をしたのは新島没後同志社社長・京都看病婦学校校長であった小崎弘道である。

新島は京都看病婦学校と同志社病院の創立に情熱を傾けた。内外の人々からの資金援助もあった。初代の看病学の教師リチャーズ Linda Richards (一八四一—一九三〇) は「アメリカ最初の有資格看護婦 America's first trained nurse」とされる人で、アメリカ看護史上名を知られる。初期にあいついで三人(リチャーズ、スミス、フレーザー)の外国人看護婦が来着したのも特記に値いすることで、高木兼寛創始の有志共立東京病院看護婦養成所の創始、明治一八年より遅れること僅か、同一九年四月にわが国第二番目の近代看護教育機関として発足した同校が、わが国の看護・医療に与えた影響にははかりしれないものがある。発足時は校長 新島、病院長 ペリーであり、佐伯が客員外科・産婦人科医として京都看病婦学校に関係をもつたころはすでに新島は亡く、リチャーズも同二年一〇月帰国していたが、学校・病院は活況を呈していた。

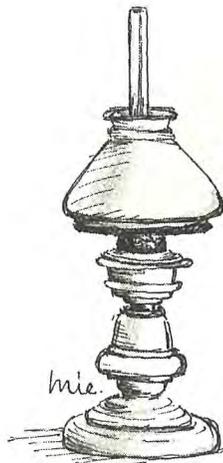
(五)

一八九〇年代後半、同志社は内外から種々の圧力を受けた。京都看病婦学校・同志社病院の管理権も大きな問題となったが、結局明治三〇年五月より佐伯がこれを維持管理することになった。生徒・同窓生らも一致して反対したがいかんともし難く、三九年には同志社と完全

に縁がきれることになった。佐伯はその後もキリスト教主義の教育を貫いた。京都YMCAの創始にも関与し、その初代理事長に就いた。彼の妻は同志社女学校を卒業した土倉小糸であったが、その父 土倉庄三郎は新島と親交のあった人である。

佐伯を通じて新島の大きさを知る昨今である。

(医師・日本医史学会理事)



京都看病婦学校と新島襄

亀山美知子

一八九〇年（明治二三）、京都の町には洋装の看護婦の姿があった。

看護婦たちは連れだって貧しい家庭を訪問し、病人を癒そうとしていたのである。初めのころは看護婦を見ればびっくりした京都の町の人びとも、次第にその姿に親しみを覚えるようになった。



J・C・ペリー

この看護婦たちは、日本で最初の看護学校の一つである京都看病婦学校の卒業生である。京都看病婦学校は、ときに同志社看病婦学校と呼ばれ、同志社病院を実習場としていた。京都看病婦学校が誕生するに、いささかの経緯があった。

一八八二年（明治一五）、新島襄は宣教医J・C・ペリーと医学校設立について相談した。ペリーは医学校設立のための構想を練った。そ

れはプロテスタントの各派が協力して、医学校と看護学校を設立するという、連合医学校構想だった。彼は帰国中に各派に呼びかける一方で、知人を通じて寄附金集めをはじめたのだった。だが、この計画は難航した。

一八八四年（明治一七）一月一二日、ペリーがボストンから、ニューヨークの合衆国長老教会外国伝道協会総主事ラウリーに宛てた手紙には、同教会に属するフィラデルフィアのアグニュー医師からペリーに宛てて、彼の依頼した寄附に対して大半の関係者が同意しないという意志を明らかにし、他はそれ以外の「有用な」仕事なら一所懸命協力しようと答え、計画に賛意を表わしたのはわずかに三、四人の牧師だけだった、という手紙を受け取ったと書かれている。

二月二六日、横浜居留地のJ・C・ヘボンからもラウリーに宛てて次のような手紙が送られた。

当伝道地宛の前回のお手紙には、ペリー博士の医学校設置案に対する新しい方向について、それに提案されている計画とは、教授連が



同志社病院のスケッチ

数個の伝道協会によつて支援せられ、かつ、その責任を負うという意味であります。勿論、この案はまことに結構である

とわたしも考えますものの、医学者は一般に神学者ではありませんし、やがましい教派的な線を引きかねいのですから、もしそのまま放任しておけば、却つて皆が一緒に調和的に運営して行くのではないかと、わたしも考えている次第です。しかし、教授を任命する場合、

日本にキリストの聖國を伝達する目的として医学を従属すべきであると考えような敬虔なクリスチャン以外のものを任命しないように、注意しなければなりません。それらの人々がただ科学者だけでは困ります。それから医学校設置の場所が重大な問題だと思ひます。

(高谷道男『ヘボン書簡集』三二七〜三二八頁)

医師であり、長老教会東京ミッシヨンの重鎮でもあるヘボンは、当時神学者養成の早期の実現を目指していたから、自分の属する教会が、それ以外の目的で予算をとり崩す事業にかかわることに危惧を覚えた

のである。しかも、ペリーの提案した医学校の設置場所が京都であるというのも気に入らぬものだった。その理由は、東京遷都後の京都が副次的な都市になつてしまつてゐること、外国人や宣教師の旅行や居住には日本政府の許可があることの煩しさがあつたからだつた。ヘボンは「外国伝道協会が異教徒の伝道事業のために献げられた金を、こうした無駄なことに消費する」ということ自体が問題だと考えていたのだつた。ラウリーはヘボンと旧知の仲であり、ヘボンは日本の事情を時どき彼に書き送つてゐる。

ペリーが同志社のために準備しようとした連合医学校構想は、こうして潰れてしまつた。看護学校設立案だけが生き残つたのである。一八八三年(明治一六)四月に大阪の川口居留地で開催されたプロテスタント宣教師全体会議でも、「女性の教育」という一分科会では日本でキリスト教看護婦の養成は重要なものとして決議がなされていたがい、日本人看護婦の養成は急務だつた。

新島とペリーは同志社病院と京都看護婦学校の設立へと計画を手直しした。学校と病院設立のための資金は京阪神を中心に寄附を集めて充当し、二千坪の敷地の購入を行なうとともに、アメリカン・ボードなどからの援助金で建築を行なつた。ペリーは同志社病院の院長として京都看護婦学校の実習に協力することになつた。また、学校長にはアメリカカのボストン市立病院の看護婦学校監督の地位を捨てて来日したリチャード・リチャーズが就任した。

リチャーズは、一八七二年にスーザン・ダイモック(女医)によつて開設されたニューイングランド母子病院の看護婦学校第一期生の筆

頭として名簿に名を残した人物であり、アメリカで最初の看護婦の人だつた。その彼女が日本で最初の看護教育に携ることになつたのは、奇しき縁というほかはない。

一八八七年一月一日、京都看病婦学校と同志社病院の開業式は盛大に行なわれたのである。

リチャーズはベリーのほかにも女医サラ・バックレーの協力も得て日本人看護婦の指導をはじめた。通訳には伊藤テツがあつた。テツは、のちに看護婦になつてゐる。修学期間は、当時のアメリカの看護学校と同様に二年にした。小柄な日本人生徒たちは、明るくて礼儀正しく、驚くべき忍耐力をもつてゐた。しかも、お手本どりに何でもできるので実習の効果はすぐ表われた。リチャーズは日本人女性が看護婦に適した素質をもつてゐることに感動した。

教育がはじまつて半年経つたころ、看護学校を京都の有力者の一人が訪れた。ジフテリアに罹つてゐる妻のために看護婦の派遣を頼みに来たのだつた。リチャーズは京都の人びとに看護婦の存在を知らせる良い機会と考えて、有能な生徒と一緒にその家を訪問した。その一方で、リチャーズは宣教師としての使命も果たすために、バイブル・クラスなども開くようになった。看護婦生徒たちが彼女の影響を受けるようになったのは、いうまでもなかつた。

新島襄の妻八重は、夫の死後間となく日赤篤志看護婦人会の講習を受け、篤志看護婦となつた。日清、日露の戦時救護活動を行なう一方、後進の指導にも努めた。

創設者新島襄の臨終の場には、彼の設立した京都看病婦学校卒業生

不破ユウが駆けつけた。やがて卒業生たちは近隣の府県の看護学校の指導者として赴くようになった。

貧困家庭を訪問して看護を行なう看護婦たちは、求めに応じて一般家庭にも訪問するようになり、明治二〇年代半ばの京都の町では、病人がいる家庭に看護婦を派遣するという見舞いの方法が流行した。看護婦は、すっかり京都の町に根づいたのである。そして、彼女たちの存在そのものがキリスト教の布教につながつた。

これに刺激された真宗系の関係者らが京華看病婦学校を設立したのは一八九三年（明治二六）のことである。京都看病婦学校の与えた影響の大きさの一端を示す出来事であつた。

今、日本は超高齢化社会という未曾有の時代を迎え、医療・福祉政策の一大転期に遭遇している。このときにあつて、看護・保健活動の重要かつ有用性があらためて認識されるに至つた。だが、看護事業というものは、本来的には、単に政策の中に埋没すべきものではない。とくに高齢者に対しては、より血の通つた人間的つながりこそが、何にもまして援助そのものにつながるからである。

この国は複雑になりすぎた。この国の、人びとに何が最も必要なことなのか、透徹した理論をみることは難しい。だが、今、もしも、新島襄が甦つたとしたら、京都看病婦学校を復興するのではないだろうか。決して大きな事業ではないが、その影響力は件のごとく、次第に頭れるはずであるのだから。

（京都市立看護短期大学教授）

校祖を育てた安中藩とその時代

神馬彌三郎

新島襄は、わずか四十八歳で生涯を閉じている。教育者としては決して長いとはいえない。その一生を顧みると、波乱と曲折と、そしてなによりも冒険と幸運に満ちたものであったといわざるを得ない。

その第一歩こそ、江戸湾上でのオランダ軍艦との遭遇であった。その日から、十八歳の青年新島の熱い胸のうちには、国禁を犯してでも、先進国アメリカへ渡りたいという、せつなる願いが渦を巻くのである。新しい国から、新しい技術と思想を学びとろうとする、青年特有の滾る心がそこにはある。いつの時代にも、歴史は常に青年にその役割をあたえてきた。新島は自からに芽ばえたフロンティア精神に、命を賭して挑んでいったのである。

新島は、天保十四年（一八四三）上州（群馬県）安中藩士、新島民治の長男として江戸屋敷で生まれている。四人兄弟であったが、上の三人までが女性で、跡継ぎとして待望の男の児であった。少年時代の新島は、気性の激しい子供であったようだ。温厚な父親は、彼を藩の書道家にすべく教育したが、彼の方がそういうものに、いっこうに興

味をしめさなかった。

当時の安中藩は、才智に勝れた明君といわれた、板倉勝明が藩主であった。勝明は徳川齊昭、松平慶永らと交友あつく、国防の急務を論ずるなど、政治的にも活躍した人である。領内に庶民教育のための安中郷学校を開校させ、藩士と領民を一体とした教育にも熱を入れていた。安政二年（一八五五）には、「日本最古のマラソン」といわれた「遠足」を、藩内の競技としたことでも知られる。若き日の新島こそ、こうした安中藩の風に、もつとも鋭敏に靡き、しかもそれに応えようとした一人ではなかったか。

いうまでもなく、その背景には嘉永六年（一八五三）アメリカのペリー提督の率いる艦隊が、浦賀に來航するという、歴史的イベントがあった。それと前後して、フランス、オランダ、イギリスなどの、当時の資本主義列強諸国からのわが国への圧力は、日に日にたかまりつつあった。漠然としたものであったが、新島の小さな胸の内には「近い将来、わが国は大きく改革されなければならない」という、焦躁感をと

もなつた時代的認識があつたとおもわれる。彼は漢字や蘭字にいそしむかたわら、心身を鍛練して、武士道をなおざりにはしなかつた。

ところが安政四年、彼が十五歳のとき、精神的支柱とも仰いだ藩主勝明が死んだ。跡を継いだ勝股は、ただただ勤王の大義に賛同するだけで、藩内の空気は停頓するばかりであつた。さし迫つた潮流を前にして、将来に対する、なんのビジョンももたない、保守主義の藩政は、熱い気力に満ちた若者にとつて、たえがたい不満となつて彼をおそつた。藩士への道に見切りをつけ、憂国の志をいだいた新島の眼は、この時、海外に向けられたといえる。あのオランダ軍艦の入港は、欧米の技術文明が、はるかに日本をしのぐものであることを無言のうちに青年新島の脳裡にやきつけた。

新島が幕府の禁を犯して渡米したのは、二十二歳のときである。それは吉田松陰が、伊豆の下田でアメリカの軍艦に乗りこもうとして失敗、牢屋につながれたときから、ちょうど十年後である。松陰の不運を新島が知らないはずはない。同じ危険で無謀この上ない行為であつた。しかし、彼はそれを敢行し、密航に成功するのである。

密航者新島にとつて、最大の危機ともみえた出来事が、その後の彼に大きな幸運をもたらすことになる。新島が乗り込んだアメリカ船ワイルド・ロウヴァー号は、希望峰を回つて、一年がかりでボストンに到着する。そのロウヴァー号の船主こそ、アメリカ滞在中の彼が、忘れることのできない恩人アルフィアス・ハーディー氏であつたからである。船中における新島は、甲斐々々しく働く好青年であつた。船内の余暇はすべて語学の勉強にあてられた。やがて彼の憂国の志は、ロウヴァー号の船長テイラーの心をうごかすまでになる。船長テイラー

は、航海中の新島を「ジョー」と呼んで可愛いがたつた。

いままさに未知の文明社会へ、単身で乗りこもうとする若き新島。彼はアメリカ人船員たちの口をついてでる自分の愛称「ジョー」を聞くたびに、つとめてその名にふさわしい人間でありたいと考えたに違いない。実質的な新島のキリスト教による洗礼は、この航海中のワイルド・ロウヴァー号の船上でおこなわれたといえまいか。この時こそ、新島裏の誕生である。彼は帰国後も、もつぱらこの名を用い、漢字「裏」の字を当てている。新島はキリスト者としての自覚と、苦難の時代の初心を忘れまいとしたのである。こうして新島裏は、キリスト教精神にもとづく、自由と人間愛をテーマに、京都において教育事業を始めるのである。

平成元年はすでに終ろうとしている。まさに変革の時代を露呈した一年であつた。モノと心の葛藤が、さらに新しい局面を迎え、われわれがいまだ経験したことのない問題を、これからも提起しつづけるであらう。もちろん大切なのは心・精神である。

幕末という混沌の時代を生きた新島裏には、アメリカという眼に見える目標があつた。現代の若者には、具体的にめざす目標がなにもない。それは自からを律する理性と寛容さをとりもどし、一人の純粹な人間にたちかえることである。むしろ一人々々が自己の精神世界へ向けて、壮烈な密航をくわだてなければならぬところに、難しさがあるといえようか。日本へ到着したポートピアブルは過去最高を記録した。新島は難民としてアメリカへ密航したわけではないが、どちらも非合法である点では同じである。あの多数の難民の中に、ベトナムの新島裏が一人でもいてくれることを、祈るほかないのである。(作家)

函館に生きる新島襄

津軽海峡を渡ると函館山があり、大きく右回すると湾の懐に街が広がっている。山裾の街には歴史が集約された情緒がただよっている。下田に次いで開港した函館は、北の蝦夷地にあり、捕鯨と極東の要地として各国の軍艦や商船などが出入港し、幕府は蝦夷警衛の



福士屋卯之吉(福士成豊)

重要な拠点として奉行所を置いて施されたが、子供達は箱館奉行の役人よりも英語、ロシア語、

仏語の必要から帳に書きなどして当つこしながら外国語を覚えていた。

一八六四年の春、青年新島七五三太が意を決し、江戸神田の安中藩邸を脱藩して快風丸で函館に到着する。国禁を犯しての日本脱国は、漢籍や蘭字を学び西洋文明に燃えた。高等数学や航海術を江戸講武場の軍艦教授所できわめて、勝海舟を知る。志しは箱館武田塾へと、憂国又憂国の念はつるばかりであった。

この頃の函館の街は、船が港に入ると沖ノ口役所があり、出入港の届出をしなければならぬ。そこを過ぎると運上役所があつて、外国船の出入港や外国人に関する税関などの業務をするところがある。上陸してそこから坂を上ると箱館奉行所があつた。木立に囲まれた広い敷地に立つと港灣や船の出入港などひとめでわかる。武田塾は、奉行所の門前西側にあつて、箱館開港により欧米の文化、学術、航海、測量、砲術、築城、造船、化学器械など研究して学ぶ諸術調所で蘭学者の武田斐三郎を箱館表に勤めさせ、教授役とした。

千代 肇



幕末の函館〔蝦夷風物之図〕

学生は、幕吏、藩士の子弟はもとより水主、足輕にいたるまで、公私貴賤の差別なく入学を許していたが、新島は武田と語り合うことがなかった。

奉行所の東は人家も少なく、そこにロシア領事館と附属病院、英国領事館、仏国領事館、米国領事館ができた。いまの函館ハリストス正教会、日本聖公会、函館ヨハネ教会、カトリック教会元町教会、遺愛幼稚園のある地域である。ロシア領事館付司祭ニコライの部屋に住むようになった新島は、眼病の治療を隣りのロシア病院で受け、病人の治療や食事、貧富の差別ない西洋医学を通しての慈善事業を我国と較べて慨嘆している。

奉行所から西に沢辺数馬の神明社があり、神明社より高いところに英商デウスの家があった。山ノ上町とは神明社より西にあり、福士屋卯之吉（福士成豊）が子供のとき通った愛地塾や実父で初めて洋式船箱館丸を建造した船匠續豊次の家があった。このあたりから港にかけて家並も多く、賑やかな下町と続き、遊郭も多かった。

神明社の坂を下った大町には回船問屋などあったが、運上役所に近く外国人居留地である築島が一八六一（文久元）年に完成した。外国人の往来が多くなり、箱館奉行の監督がまならぬため、大町築出地は二千坪の方形で周囲と中央に通りを設け、左右十区画として外国人に居留させ、居留地はみだりに通行できぬように橋をかけ、港に面するところに小舟が着岸できる波戸場が設けられていた。この居留地を監視する運上役所附改所は、波戸場がみえる運上役所に近い一角にあった。

卯之吉が勤務したアレクサンダー・ポップ・ポーターの商店は、橋を渡ったすぐ左にあり、ポーターは犬が好きで、新島が脱国のときに吠えられたのもポーターの家であった。中央通りの先に波戸場があり、その左角にフレデリック・ウィルキーの事務所があり、新島が乗船まで待機していたのはこの家であったと思われる。新島は波戸場から福士屋卯之吉の手引きで、小舟に乗ってベルリン号に乗船するが、監視の運上役所附改所の窓からは港内の様子がよくみえた。小舟の櫓の音も聞える所に改所があり、その波戸場奇りの隣に米国代理領事のウイリアム・ピッツが住んでいた。卯之吉は、ピッツからよく英語を学んだといわれるほどピッツとは親しく、すでに英語の辞典も作成していたが、外人の通訳などをし役人とも顔見知



函館脱出記念碑

講演、*「新島襄と函館」*や新島襄作詩歌朗詠、同志社在校生らによる校歌合唱で有意義な夜を送った。この気運は、函館市と同志社大学によって記念碑建設運動となり、一九五四年に現在地に設置されることになった。新島襄海外渡航の碑は、八月二十一日午前十一時に宗藤大陸市長、大塚節治総長、関係者、校友、学生など百人が参列して除幕式が挙行された。記念碑は、幅二〇センチメートル、高さ七五センチメートルの台石に田畑忍前学長が新島襄海外渡航乗船之處と記した大理石がはめられ、その上に幅六〇センチメートル、高さ一八〇センチメートルの宮城県産井内石に新島襄自筆「男兒決志馳千里……」が刻まれている。裏面に大塚総長による渡米のいきさつや帰朝後の同志社設立など新島先生の業績が書かれている。碑の設置費用は同志社と函館市が十万円を分担したものである。

元治元年、一八六四A D 七月十七日、新島襄海外渡航乗船之處。

旧外人居留地の波戸場にある碑は、毎年校友函館クラブが脱国の日に朝集まって清掃をしているが、函館がより同志社と交流を深めるようになったのは函館キャンプである。一九八一年に学生課長の井上勲兄が函館博物館に尋ねてこられた。安中キャンプを希望する学生が年々少なくなったので、函館キャンプを考えたいとのことであった。先輩の同志社高商出身の張仁忠氏と相談し、旧ロシア領事館の建物である道南青年の家での宿泊交渉もまともになり、翌年から実施の運びになったが、成功するかどうか井上課長が心配された函館キャンプは第八回となり、二〇人が八〇人と、しかも希望者が多く抽選であるという。校友も学生と語る楽しみもあるが、学生が校友から学ぶ面も多く、「元治元年新島七五三太二十一歳」懸賞論文「新島研究」第六六号を発表した頼富雅博君も調査のため再度函館を訪れている。これまでに何人か同じ学生の顔を見ながら、校友との歓談に新しく同志社ファミリーの和が広げられていることを感ずる。

函館には、明治に同志社の箱館組合教会が設立し、堀貞一牧師と片山幽吉牧師による新島先生の遺髪分贈が「脱国された至誠が多くの人々に永く良き教訓となることを祈る」にあつた。それがいまま函館を訪れる人達に心の糧となっているのである。

(一九五八(昭和三十三年)大学経済学部卒業・市立函館博物館学芸員)

波戸場は、「大町築出地外国人江御渡規則書 文久元酉年從四月」市立函館図書館蔵の「外国人江貨渡地絵図」に原本記載の名称である。波止場であり、外国船舶の貨物や契約書受渡しの場所であった。

新島襄今治教会来援記

美藤章

摂津第一基督公会（現神戸教会）の牧師、J・L・アッキンソンは一八七六（明治九）年四月七日金曜日、同教会員鈴木清とともに豫州今治の小さな港に到着した。到着後一行は山崎屋という旅舎に宿泊し、翌土曜日及び日曜日の両日、町内三カ所の個人家宅においてキリスト教の講話を説いた。この出来事が今治の地に福音の種の蒔かれた最初である。町民は青い目の異人を見るのも、キリスト教の話聞くのも初めての事であり、好奇心も大いに作用して、小さな町中にはすぐ噂も広がったのであろう、聴衆は日増しに増して、五、六百人にもなった。同行者鈴木清はその時の様子を、『七一雑報』第一九号（明治九年五月十二日発行）に詳しく記している。

以後アッキンソンは再三再四今治を訪れ、福音伝道に情熱を注いだ。今治の地は彼の熱意によって次第に耕され、福音の種は力強く芽を出し、穂を付け、実を結んでゆく。彼が今治の地に第一歩を踏み入れて以来三年間で彼自身五回の来今、またその都度に、横山（二階堂）円造、小崎弘道、ダッドレー女史、パロス女史などを共に伴い来て、伝

道に惜しみなく力を注いだのである。そうした三年間が今治教会創立前史にあたり、やがて四国で最初の教会創立を迎えるのである。

今治教会創立年月日は一八七九年（明治十二）年九月二十一日である。教会創立にあたり、信徒は当日に洗礼を受ける六名と大阪教会から一名の転入会者、計七名であった。牧師は同志社第一回卒業生の人、伊勢（横井）時雄であった。彼は熊本バンドの一人であり、新島スピリットに深い感化を受け、福音伝道の使命に燃えて日本各地に赴いた若き丈夫らの一人である。当日、教会創立礼拝には、新島襄初め、アッキンソン、村上俊吉、二階堂円造、上代知新、金森通倫、デホレストなど関西各方面より錚々たる面々が列席している。その礼拝において、特に新島襄とアッキンソンは重要な司式を執り行っているのが注目される。今治基督教会沿革小史（以下『小史』と略）は七一雑報、第四卷三九号（明治十二年九月二十六日発行）の掲載を引用して、当日の創立礼拝の様子を次のように記している。

〔前略〕翌二一日の安息日には午前九時より集り、讚美歌を以て其

式を始めしが、第一に二階堂氏聖書を読み祈禱をなし、第二に上代氏公会の主意と信仰の箇條を読み、第三にアッキンソン氏六人にバプテスマを施し、第四に村上氏公会の兄弟の約束を読み新立教会に祝詞を述べ、第五に伊勢氏を牧師の職につくるの按手礼を行い、新島氏祈禱をなし並に新牧師に勸を述べ、第六にデホレスト氏新教会に勸を言い、第七に村上氏新牧師に祝詞を述べ、終りて後新島氏と伊勢氏と晚餐を執行し、伊勢氏祝禱して会を散じたり。時に午前十一時過ぎなりき。午後は三時より集りて二階堂、上代の二氏演説をなし、其夜は新島氏とアッキンソン氏と演説をされしが、聴衆凡そ百人に近かしと見受けられたり。(傍点筆者)。

新島は彼のものとて育ち、巢立つて行った若き丈夫らの一人である伊勢時雄の按手礼を執行し、神への厚い祈りを献げ、新任の牧者に力強い勧めをなしている。更に引き続いて、新島はいま按手礼をもって任職したばかりの伊勢と共に、聖餐式を執行している。新島が今治に初めて来援し、しかも教会創立礼拝にあつて按手礼及び聖餐式を執行する、その光景を思い浮かべる時、それは百年前の出来事でありつつ、今なお非常に厳肅で且つ大きな感動を覚えるのである。

以後新島は翌年、翌々年と引き続いて今治に来援し、今治教会での伝道に大いに力を注いだのである。もちろん新島単身の来援ではなく、錚々たる面々を同伴している。翌一八八〇(明治十三年)十月十九日には、新島は神戸女学院のダッドレー女史と共に来今し、その日の夜には早速に女史は婦人会で説教をしている。翌日の夜には新島が説教し、来聴者三百余名、更に二十一日には五百余名、会堂は立錫の余地もなく、多くの人々が道路にあふれて、その警咳に接せんとした、

と『小史』は記している。

翌一八八一(明治十四年)七月三日、今治教会は仮会堂から新会堂を捧献し、献堂式を執り行った。その献堂式には新島夫妻が来援し、祝詞を述べている。更に七月五日には、松山で昼夜に亘つて大講演会を開き、昼には来会者約七百名、新島は『自由論』と題して講演している。また夜には千二百〜三百名が集り、新島は『基督教伝播』と題して講演している。因に、その昼夜の講演会での演題と講演者は次の通りである。『開会の趣旨』上代知新。『生命の洗濯』真鍋定造。『基督教は文明の精神』伊勢時雄。『本朝古典の説』松山高吉。『良心論』アッキンソン。夜の集会では、『上帝の必有を論ず』真鍋定造。『宗教論』上代知新。『愛国論』松山高吉。『基督教と理学の關係』伊勢時雄、となつてゐる。この講演会がその後の松山での伝道を好転させ、大きな影響力を与えたのである。

新島が今治教会に来援したのは一八七九年九月二十一日の創立礼拝を最初として、以後年一回、三年に亘つてである。この三回の来援が今治教会創立当初の伝道に対して如何に大きな助力を注ぎ、また如何に強い感化、影響を与えたか、その事實は『小史』の中に脈々とあふれ、今なお読む者にひしひしと伝わってくるのである。『行け、行け、行け、行け、行け、行け、行け』と強かれノ靈妙なる御手汝を導かん』とは、新島が一八七九(明治十二年)六月十二日、第一回卒業式に際して十五人の卒業生たちに贈つた言葉である。この言葉を心霊の震える思いで拝聴した十五人の中に伊勢時雄もいた。そしてこの言葉に突き動かされて、彼は遙か豫州今治の地に赴いたのである。そしてまた、当時困難を極めた伝道の場合にあつて、新島自身がその伝道の現場に快く

足を運び、惜しみなく力を注ぎ、応援した事実は教会に立つ者にとつて、どんなにか大きな励ましとなり、喜びとなったであろう。『行け、行け！』という新島の言葉は『私も行くぞ』『私も来たぞ』と彼自身の来援によって一層真実且つ力強く成就したのである。その出来事は

『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教育の受難(明治後半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹の権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などはそれぞれ独自に、

今治教会草創期に歴史的事実として鮮明に刻印されているのである。

(一九六四(昭和三十九)年大学神学部卒業・一九六六(昭和四十二年)大学院神学研究科修士課程修了・日本基督教団今治教会 牧師)

読者に訴えるものをもつはずである。

「通科編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になつていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六、〇〇〇円

送料五二〇円

「資料編」約二〇〇〇ページ。

頒価・二二、〇〇〇円

送料八三〇円

発行・学校法人同志社

取扱い・同志社収益事業課

(☎〇七五―二五・一三〇三八)